

千宗旦の出自をめぐる「利休血脈論争」について： 現代家元システムへの道程

著者	廣田 吉崇
雑誌名	日本研究
巻	41
ページ	13-72
発行年	2010-03-31
その他の言語のタイトル	On the "Rikyu Blood Relationship Controversy" Surrounding the Provenance of Sen Sotan : The Path to the Contemporary Iemoto System
URL	http://doi.org/10.15055/00000500

千宗旦の出自をめぐる「利休血脈論争」について

—現代家元システムへの道程—

廣 田 吉 崇

I 家元の正統性としての「血脈」

1 千家の初期の系譜をめぐる血脈の問題

(1) はじめに

日本の伝統芸能や伝統芸術などの文化領域では、家元という存在によって、その技芸が長らく伝承されてきているという事象がみられる。「伝統」というからには、長年その技芸が脈々と伝承されてきたことはもちろん重要である。しかし、技芸を伝承してきた代々の家元という存在があれば、その「伝統」は信じられやすい傾向にある。このため、茶の湯などの「伝統」の世界では、技芸の伝承とともに、家系による権威の継承が重要な意味を持つことが多い。

表千家、裏千家および武者小路千家の三家にわかれて存続している千家は、千利休の直系の子孫の家として、また、茶の湯の家元と

して、現在もその存在感を示している。千利休以来四世紀以上にわたって千家の家系が連続して継承されてきたことはまぎれもない事実である。そして、その連続性が、茶の湯家元としての正統性の根拠ともなっている。技芸の伝承と家系の継承とは、本来別物ではあるが、往々にして一体不可分のものと考えられてきた。ここでは、家系の連続性は、技芸の伝承性への信頼を裏付けるものとなっているのである。さらにいえば、その家系が流祖にさかのぼる血脈を受け継いでいるならば、より一層の権威があることはもちろんである。ところが、千家の、その綿々たる家系の連続性に、血脈の上で連続性の弱さを含む部分がある。それは、千家の初期の系譜における、第二代千少庵、第三代千宗旦などの出自に関する問題である。一般に、血脈に関する事柄はプライバシーにかかわる微妙な問題である。しかし、千家の場合、この問題は家元の正統性の根幹をなす重要な

問題でもあり、従来から人物研究という視点でさまざまに論じられてきた実績がある。

本稿では、家元の正統性という視点から、千宗旦の出自に関する問題がいかに関論じられてきたのかを、とくに昭和三十年頃以降に論争化した経緯を中心に概観する。そして、家元システム^①の現代的展開において、この血脈の議論がいかなる意義を有していたのかについて若干の考察を試みたい。

(2) 千宗旦の出自に関する諸説と現在の理解

その連続性の弱さとは、端的にいえば、千宗旦が千利休の血脈を受け継いでいるのかという疑問である。千家第三代を継承した千宗旦は、千利休の孫である。しかし、千家第二代の千少庵は、千利休の後妻である千宗恩の連れ子とされるので、千利休と千少庵とは血縁関係がないことになる。

そこで千利休と千宗旦との関係について、いくつかの異なる考え方が生まれてきた。第一の考え方は、千少庵の妻は、千利休の実の娘「お亀」^②であるとする説である。千宗旦は、千少庵とお亀との間の子であるので、お亀を通じて、千利休の血脈を伝えていると考えられるのである。これが現在の通説的な理解である。第二の考え方は、千利休の実子である千道安の子が千宗旦であるという説である。千道安を通じて千利休の血脈を伝える千宗旦が、千少庵の養子になっ

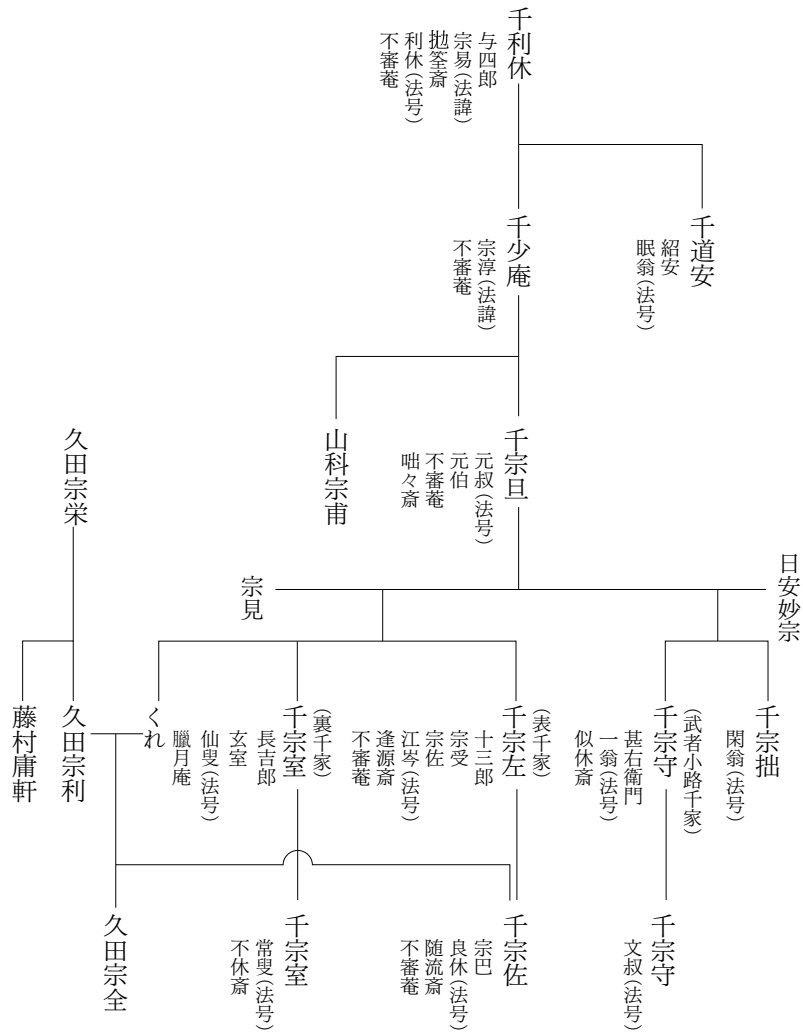
たと考えるのである。第三の考え方は、千少庵は後妻の連れ子であるという定説を否定して、千少庵は千利休の実子であり、その実子が千宗旦であると、血縁相続を考える説である。本稿では便宜上、第一の考え方を「利休娘実子説」、第二の考え方を「道安実子説」、第三の考え方を「直系実子説」と名づけることとする。以上の説明からも明らかであろうが、この議論の根底には、千利休の血脈が、千宗旦、ひいては現在の家元にまで受け継がれているのかという問題がある。

当事者である千家自身は、現在この部分をどのように考えているのだろうか。平成十九年（二〇〇七）は、ちょうど千宗旦三百五十年忌であり、表千家および裏千家は、それぞれ千宗旦に関する展覧会を開催した^③。これらの展覧会の図録には、千宗旦を中心とする千家の系図が掲載されている。図1「千家系譜」^④が表千家のものであり、図2「宗旦周辺系譜」^⑤が裏千家のものである。これが現在の千家の公式見解と考えられる。

まず、表千家の「千家系譜」をみると、主に男系だけを示しており、千少庵および千宗旦の出自についての議論にふれていない。しかし、図録の「元伯宗旦年譜」^⑥のなかでは、

千宗旦、少庵の長男として生まれる。母は利休の娘といわれる^⑥

図1 千家系譜



出典 特別展「三百五十年遠忌記念 元伯宗旦展―残された手紙にみる生涯と茶の湯―」図録 不審菴文庫編集、表千家
 北山会館発行、平成十九年（二〇〇七）、六一頁。

とある。これによれば、「利休娘実子説」によりながらも、肝心の部分は「いわれる」として断定をさせている。

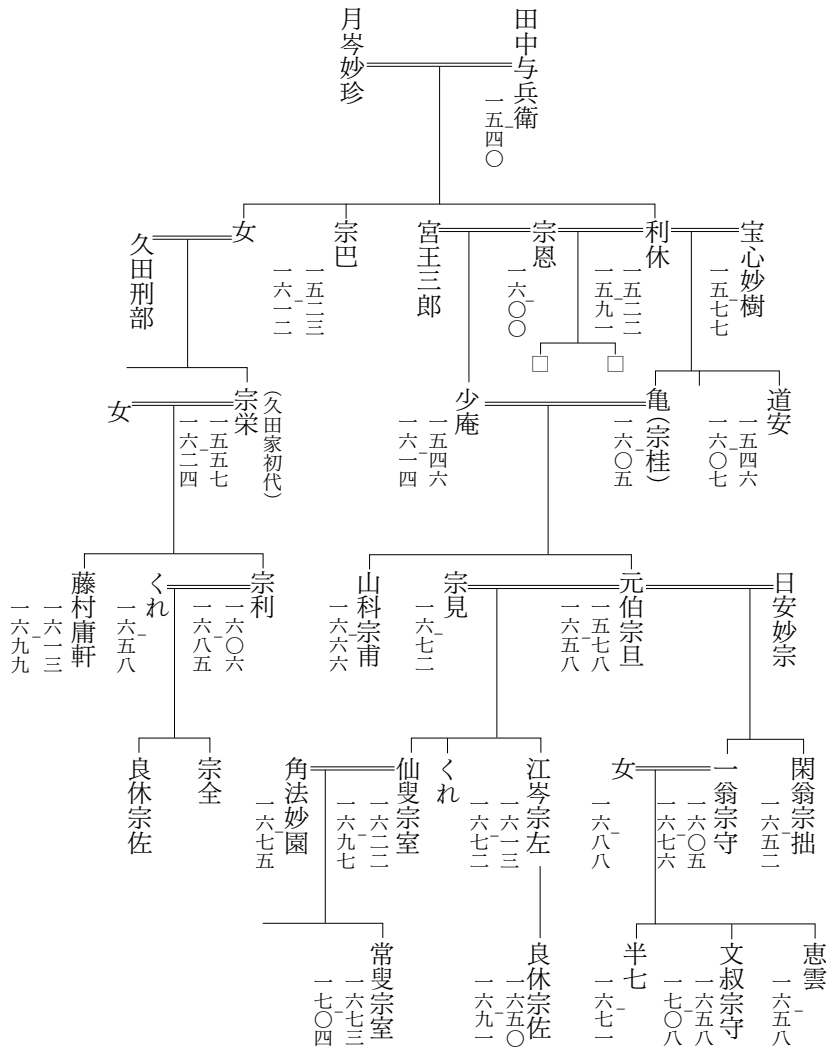
一方、裏千家の「宗旦周辺系譜」をみると、あきらかに「利休娘実子説」を示している。しかし、注意してみると、千少庵妻のお亀を千利休の先妻の実子と位置付けている。つぎの図3のとおり、お亀を千利休の娘とする場合、母親は不明としてとりあつかわれるのが一般的である。この点で、裏千家の「宗旦周辺系譜」は新たな考え方を示している。

研究者の間ではどのように理解されているのか、いくつかの系図を示すこととする。

図3「千家略系図」⁷⁾は、現在の通説的な理解を簡潔に示したものである。図2の裏千家の系図とよく似ているが、ここではお亀の母親が明らかにされていない。

図4「千家および楽家系図」⁸⁾は、かなり趣を異にするものである。楽焼の楽家が千利休の血脈であるという、ある時期に強く

図2 宗旦周辺系譜

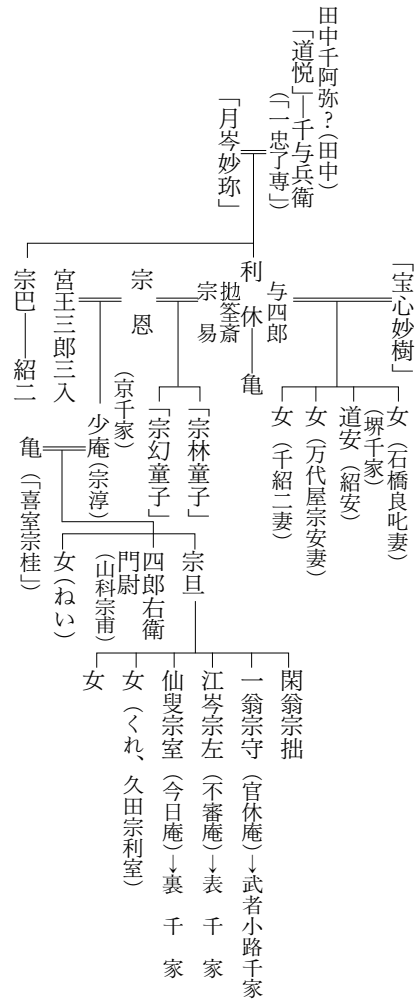


出典 宗旦三百五十年忌記念 秋季特別展「千宗旦」図録、茶道資料館編集発行、平成十九年（二〇〇七）二三三四頁。

主張された考え方によっているものである。

図5「利休一族略系図」⁹⁾は、研究者の間で議論のあることをすべて書き込んだ系図である。通説である図3を骨子として、図4にある説も「一説」として掲載している。図3と比較して一見して明らかとなり、千利休の子供が増えている。とくに母親を示さない子供が五人もいて、図1および図2の系図とは距離が感じられる内容となっている。

図3 千家略系図

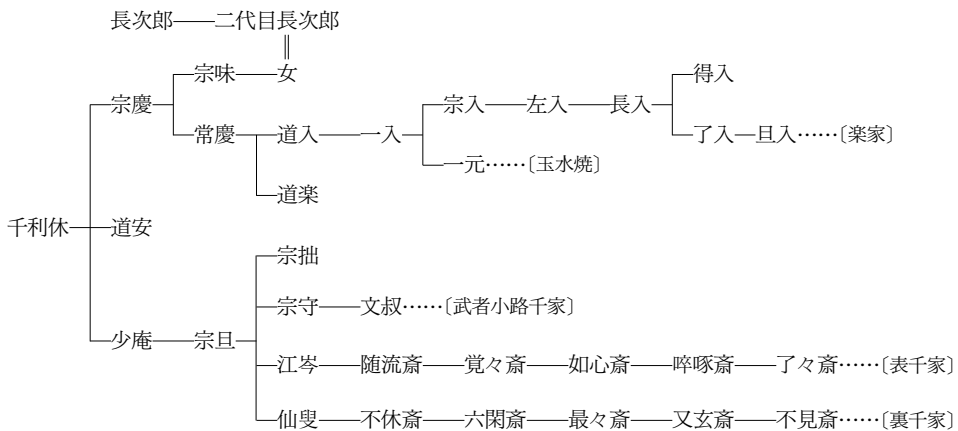


出典 村井康彦『千利休追跡』角川書店、平成二年（一九九〇）、四二頁。

(3) 本稿の目的

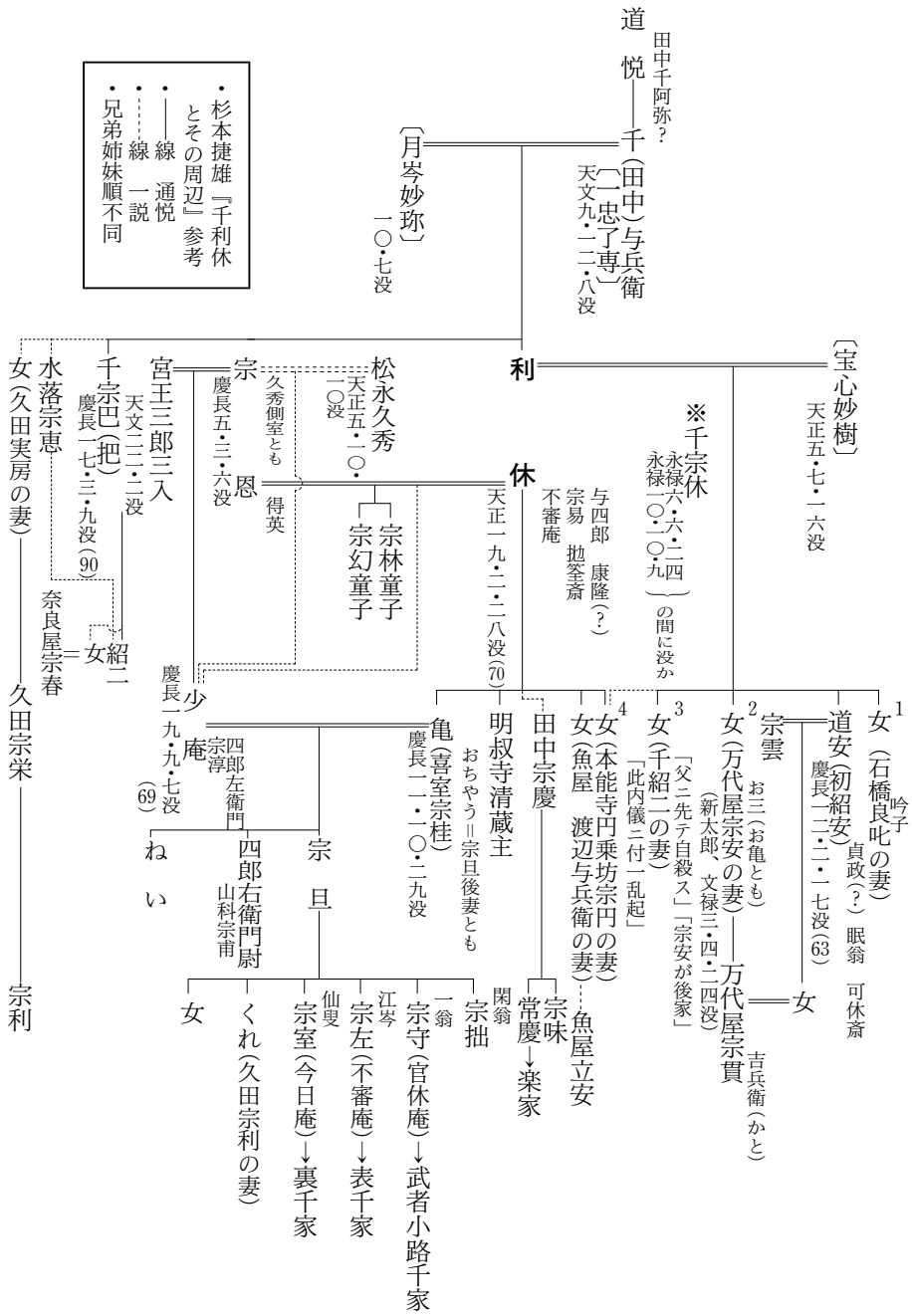
現在の千家および研究者の理解を系図の形で比較したが、ここからも容易にわかるように、その考え方には一部にかなりの違いがみられる。結論からのべると、実はこうした理解の混乱は、現代におこったものではなく、すでに近世から存在しているものである。そもそもが四百年以上前の一商人の家系であり、はっきりとしたことがわかる方が不思議というものである。しかし、子孫が茶の湯の家元として存続したために、千家自身のみならずからの家の歴史を語りざるをえなかつたし、周囲も熱心にそれを求めるといふ状況があつた。そもそも近世では家系の潤色はそれほど驚くべきことでもない。

図4 千家および楽家系図



出典 大河内風船子『長次郎 楽代々』日本陶磁大系第十七巻、平凡社、平成二年（1990）、88頁。

図5 利休一族略系図



出典 米原正義『天下一名人 千利休』淡交社、平成五年(一九九三)、三〇四頁。

ところで、本稿で焦点をあてたいのは、現代のある時期に千家の家系が熱心に論じられたという現象である。これはかならずしも千家の本意ではなかったかもしれないが、とくに昭和三十年頃以降、この問題が論争の様相を呈した時期があった。

筆者は、千宗旦の出自に関する論争的な問題に何らかの結論を出すようにするものではない。諸説が併存し、対立してきた状況をそのままとらえて、その原因と背景について考察することが本稿のめざすところである。

2 学問としての茶の湯研究と「利休血脈論争」

(1) 茶の湯研究の歴史

茶の湯における千利休およびその家族に関する研究は、千利休以降の茶の湯の歴史とともにあるといえる。茶の湯の愛好者が、千利休の事績やその家族に深い関心を持つのは当然のことである。また、茶会や茶の湯のけいこの場において、茶人の逸話はふさわしい話題として好まれた。そうした状況のなかで、茶人の逸話がさらに生み出され、語られることとなり、千利休やその家族のイメージを拡大させていく現象がみられた。

もともと好事家的な関心としてはじまった茶の湯研究であるが、それが本格的に学問としての研究となるのは、昭和初期¹⁰まで待たなければならぬ。それは茶の湯の実技者による自己学習的な研究か

ら、西欧流の学識を身につけた近代知識人による、茶の湯を客観視した文化史的な研究への変化である。このような研究の先行的なものとして昭和四年(一九二九)の高橋龍雄『茶道』¹¹があり、その後、昭和十年(一九三五)からは『茶道全集』全十五巻¹²が刊行されることとなる。

こうしたなかで、家元システムのもとで茶の湯の実技を学ぶ「流儀茶」の分野でも、研究を意識したあらたな動きがみられる。昭和十二年(一九三七)一月に創刊された表千家の機関誌『わび』¹³は、巻頭言で、

殊に近年我国文化の再検討、国民精神の高揚が唱へられ、この思潮は茶道にも及んで、少壮の人々の間にも勃然と茶道研究の傾向を見出し、真に茶道を知らんとする声は諸方より起つて居り、他方茶道そのものに於ても、今日ほど隆盛を極める時代は、今迄に恐らくあるまい。¹⁴

とのべている。ここでは、単に実技を学ぶのではなく、「茶道研究」が重視され、それが茶の湯の隆盛に導いているものと考えられている。このために、『わび』は、流派色を弱め、茶の湯全般に係る研究成果を紹介する雑誌を志向していた。¹⁵

もちろん、流派の機関誌である以上、純粋に研究誌ということでは

宮尾道三 (宮尾太夫、宮王太夫) (?)	宮王三郎 (? ~ 1553)	木下長嘯子 (1569 ~ 1649)
「従来の所説、即ち (略) 宮尾道三の妻女だった」 (22 頁)		
「全然信用しない訳にはいかぬ」 根拠：『四祖伝書』、『茶湯雑話』 (27 頁)		
	「茶湯者ノ少庵ハ三入ノ子ナリ」 根拠：『四座役者目録』 (9 頁)	
「宮尾道三の後家 (松屋日記)、道三の女 (堺鑑)」 (20 頁)	「私は信じたいと思ふ。」 根拠：『四座役者目録』 (20 頁)	
「宮王太夫子」 根拠：『松屋日記』 (48 頁)	「少庵はまがうことなく宮王三郎の実子」 根拠：『四座役者目録』 (49 頁)	「少庵は長嘯の子ト云説 (略) (敝帚記補卷十三、雑談之部五)」 「さかしらな作意をやった時代もあった」 (50 頁)
「モト乳守ノ遊女ナリシヲ道三妻トス。道三没後利休ニ嫁ストゾ。(敝帚記補九卷、雑談一)」 (53 頁)	「道三の弟、三郎の妻であった」 根拠：『四座役者目録』 (52 頁)	
	現在は、宮王三郎の妻「という説が強いようであるが確定的でない。」 (27 頁)	
	「只今では少庵の父を、この宮王家の三郎 (三入) と考えてもよいのではないかと思われまます。」 (33 頁)	
	「三千家は、(略) 甚だみすぼらしくなる。」 (36 頁) と批判する。	
	「少庵は宗恩と宮王三郎三入との間に生まれた一子」 (17 頁)	
	「ほぼ定説となっている」 根拠：『四座役者目録』、随流齋筆『寛文八年本』 (32 頁)	

表1 千宗恩の先夫（千少庵の実父）に関する理解の変遷

論者	論文名	出典	松永久秀 (1510～1577)
末宗廣	「宗恩」	『わび』昭和十七年二月号	「松永久秀の妻女とも伝へて居る (22頁)」
鈴木半茶	「表千家代々の内室考(上)」	『わび』昭和十八年二月号	「北条美濃守氏規の女なり。はじめ松永弾正に嫁せし」根拠：『千家世代覚書』、『千家歴代室過去帳写』ほか (26頁)
片山九郎右衛門	「少庵の実父」	『茶道月報』昭和十九年六月号	
鈴木半茶	「利休と南坊宗啓(一〇)」	『茶道雑誌』昭和二十二年八月号	「北条氏規の女松永久秀に嫁せし」根拠：『千家系譜』(20頁)
鈴木半茶	「少庵伝小藁(その四)」	『茶道雑誌』昭和三十三年八月号	「『茶祖的伝』がその出典であるらしく、これは全くの誤説でしかない」(48頁)
鈴木半茶	「少庵伝小藁(その五)」	『茶道雑誌』昭和三十三年九月号	「休叟の『茶祖的伝』の中で異説をもち出して、それを『千家系譜』がその説を踏襲している」(52頁)
千宗左 (即中斎)	「少庵三百五十年忌に語る」	『茶道雑誌』昭和三十八年十一月号	「随流齋までは、(略)松永弾正久秀であると明解になっている。」(27頁)
久田宗也	「少庵略伝」	『茶道雑誌』昭和三十八年十一月号	
磯野風船子	「少庵の父を文学的に考察する(一)」	『茶道雑誌』昭和三十九年一月号	「わたくしは、宗恩が、松永久秀の妻であったという説に荷担したい」(36頁)
村井康彦	「少庵と道安(その一)」	『茶道雑誌』昭和五十二年十月号	
大河内(磯野) 風船子	「再三待庵について(一)」	『茶道雑誌』昭和六十一年十月号	「少庵は、(略)松永久秀の子として、武士道と武士の茶の湯の指導を受けた人である。」(75頁)
千芳紀 (表千家若宗匠)	「江岑宗左と随流齋(三)—新出史料の紹介と検討—」	『茶道雑誌』平成六年一月号	「別の伝承が千家にあった」「少庵の実父三入と松永久秀の深い関係があって、さきの松永久秀実父説が生じたのかもしれない。」(32、33頁)

表2 「利休血脈論争史」の主要年表

第2期		第1期		前史			区分		
昭和三十四年 (一九五九)		昭和三十三年 (一九五八)		昭和三十二年 (一九五七)	昭和二十九年 (一九五四)	昭和二十二年 (一九四七)	昭和十五年 (一九四〇)	昭和十四年 (一九三九)	年
			●鈴木半茶 道安実子説を否定する。	●鈴木半茶 道安実子説を否定する。		●鈴木半茶 千少庵が後妻千宗恩の連子であるとは通説とのべる。	●新出資料「おちやう宛の文」「おちやう」は千少庵妻の名である。	●石田誠齋「利休の血脈は道安に至つて断絶した」とのべる。	一般的説明、関連資料等
					▲井口海仙 千宗且が道安の実子とのべる。				道安実子説
			●鈴木半茶 『敵帯記補』に千少庵妻お亀は千利休娘とあると指摘する。	●鈴木半茶 『敵帯記補』の資料だけでは不十分とのべる。					利休娘実子説
									中立説、直系実子説
			●鈴木半茶「少庵伝小藁(その五)」「茶道雑誌」昭和三十三年九月号	●鈴木半茶「少庵伝小藁(その六)」「茶道雑誌」昭和三十三年十月号	●杉本捷雄「慶長八年春利休娘」お亀、②楽家の祖田中宗慶は利休の子と主張する。	●鈴木半茶「利休と南坊宗啓(一〇)」「茶道雑誌」昭和二十二年八月号	●吉田堯文「おちやう宛の文」「わび」昭和十五年七月号	●石田誠齋「千利休伝 其三」「わび」昭和十四年八月号	出典
			●吉田堯文 道安実子説を否定する。			●鈴木半茶「元伯宗且の一生」「茶道雑誌」昭和三十三年十一月号	●片山九郎右衛門「少庵の実父」「茶道月報」昭和十九年六月号	●井口海仙「道安と少庵(下)」「茶道月報」昭和二十九年二月号	●鈴木半茶「利休と宗音(三)」「茶道雑誌」昭和三十三年十月号

第 3 期								
昭和三十五年 (一九六〇)								昭和三十五年 (一九六〇) ▲磯野風船子 千家も葉家も千利休の子孫とのべる。 ●杉本捷雄 昭和三十四年論文の補論
昭和三十六年 (一九六一)								●杉本捷雄 千少庵妻に関する資料の整合性のある説明を試みる。 ●磯野風船子 井口海仙の道安実子説を批判し、杉本説を認める。
昭和三十七年 (一九六二)								●磯野風船子「佗び茶の誕生(三〇)」「茶道雑誌」昭和三十七年三月号
昭和三十八年 (一九六三)								千宗左(即中齋)「少庵三百五十年忌に語る」「茶道雑誌」昭和三十八年十一月号
昭和三十九年 (一九六四)								杉本捷雄「少庵内室のことども」「茶道雑誌」昭和三十八年十一月号 磯野風船子「少庵の父を文学的に考察する(二)」「茶道雑誌」昭和三十九年一月号
昭和四十四年 (一九六九)								磯野風船子「少庵の父を文学的に考察する(二)」「茶道雑誌」昭和三十九年二月号
昭和四十五年 (一九七〇)								林屋辰三郎「京の茶家―その成立と背景―」井口海仙ほか編「京の茶家」墨水書房、昭和四十四年十一月
昭和四十六年 (一九七一)								杉本捷雄「千利休とその周辺」淡交社、昭和四十五年四月 村井康彦「千利休―その生涯と茶湯の意味―」日本放送出版協会、昭和四十六年三月
								▲磯野風船子 千少庵は松永久秀の子、千少庵妻は千利休娘と主張する。 ●磯野風船子 最後に井口海仙を批判する。
								▲杉本捷雄 従来の見解を集大成する。同年杉本氏没。 ▲村井康彦 ①杉本説を認める、②堺千家と京千家の併存説、などを主張する。
								▲林屋辰三郎 年齢上の無理から、道安実子説をとりたいとのべる。
								●千宗左(即中齋) 従来の通説の通りでよいものと思いたいとのべる。

第 5 期				第 4 期				区分
昭和五十三年 (一九七八)				昭和五十二年 (一九七七)				年
								一般的説明、 関連資料等
				●堀口捨己 田中宗慶が 千利休の子であるという 説を否定する。				道安実子説
								●数江教一 千少庵文書 に「宗旦父」とあるため、 宗旦父は道安という考え 方を示す。
								●井口海仙 道安実子説 が資料的に実証されたと のべる。
								●中村昌生 道安実子説 がますます捨てがたいと のべる。
								▲林屋辰三郎 道安実子 説が有力となったとのべ る。
								利休娘実子説
								中立説、直系実子説
								出典
								数江教一「宗旦の父親」 『元伯宗旦文書』昭和 四十六年五月
								井口海仙「道安と宗旦」 『茶道雑誌』昭和四十六 年九月号
								中村昌生「宗旦の茶室 補遺」『茶道雑誌』昭和 四十六年九月号
								林屋辰三郎「茶書の歴史」 『日本の茶書1』平凡 社、昭和四十六年十二月
								磯野風船子「江岑につ いて」『茶道雑誌』昭和 四十六年十二月号
								堀口捨己「宗慶と二人の 長次郎(一)」『茶道雑誌』 昭和五十二年四月号
								磯野風船子「三千家誕生 の由来補訂」『茶道雑誌』 昭和五十二年四月号
								村井康彦「少庵と道安(そ の三)」『茶道雑誌』昭和 五十二年十二月号
								村井康彦「少庵と道安(そ の四)」『茶道雑誌』昭和 五十三年一月号
								村井康彦「少庵と道安(そ の五)」『茶道雑誌』昭和 五十三年二月号

第 6 期

平成七年 (二九九五)	●新出資料 随流齋筆 「寛文八年本」「少庵本 親ハ三八と申也」とある。		▲山田無庵 杉本説を受 け入れる。		山田無庵「キリシタン千 利休」河出書房新社、平 成七年一月、六四頁以下
平成六年 (二九九四)			▲米原正義 田中宗慶、 千少庵妻が千利休の子と いう通説を確認する。		千芳紀「江岑宗左と随流 齋(三)―新出史料の紹 介と検討―」『茶道雑誌』 平成六年一月号
平成五年 (二九九三)					米原正義「天下一名人 千利休」淡交社、平成五 年三月、利休年譜
平成元年 (二九八九)	●村井康彦 田中宗慶が 千利休の妻子とは考えが たいとのべる。			▲千原弘臣 ①利休―少 庵―宗旦の血統の系譜、 ②お亀は万代屋宗安の 妻、とのべる。	村井康彦「楽家家譜と楽 焼系譜」『茶道雑誌』平 成元年七月号、三六頁
昭和六十三年 (二九八八)			▲小松茂美 千少庵妻お ちやうとお亀は同一人物 である可能性が高いとの べる。		小松茂美「利休の死」中 央公論社、昭和六十三年 九月、二七六―二七九頁
昭和六十一年 (二九八六)			●大河内風船子 千少庵 を後継者にしたのは、徳 川家康と蒲生氏郷である とのべる。		大河内風船子「再三待庵 について(二)」『茶道雜 誌』昭和六十一年十月号
昭和五十七年 (一九八二)			▲千原弘臣 千少庵は千 利休実子とする直系実子 説を主張する。	▲千原弘臣 千少庵は千 利休実子とする直系実子 説を主張する。	千原弘臣「利休の年譜」 淡交社、昭和五十七年 十一月、三三三、三四四 頁ほか
				●清瀬ふさ子 千少庵文 書の「宗旦父」はどちら とも判断できないとのべ る。	清瀬ふさ子「千少庵筆『云 置き』のこと」『茶道雑誌』 昭和五十三年二月号
				▲芳賀幸四郎 利休血脈 のために両説とも作為さ れたとして否定、中立説 を主張する。	芳賀幸四郎「わび茶の研 究」淡交社、昭和五十三 年二月、一〇二頁

区分	年	一般的説明、 関連資料等	道安実子説	利休娘実子説	中立説、直系実子説	出典
	平成十三年 (二〇〇一)	▲千宗左(而妙齋) お 亀の文を「妻宗恩あて」 と紹介する。		▲矢部誠一郎 田中宗 慶、千少庵妻が千利休の 実子という説を確認す る。		矢部誠一郎「利休の家族」 『千利休のすべて』新入 物往来社、平成七年十二 月、二五～二八頁
	平成十五年 (二〇〇三)				▲中村修也 千少庵妻が 千利休娘とは考えにくい とのべ、中立説を主張す る。	千宗左(而妙齋)「茶の 湯随想」主婦の友社、平 成十三年五月、二二七頁 中村修也「千少庵論」茶 人と茶の湯の研究」思文 閣出版、平成十五年十二 月、六三頁
	平成十七年 (二〇〇五)			▲熊倉功夫 千少庵が千 利休娘と結婚したという 説の可能性は低いとのべ る。	▲熊倉功夫「千宗旦の生涯 第一回 利休と宗旦」 『茶湯』三七五号、平成 十七年五月	
	平成十九年 (二〇〇七)	●堀内宗心 千宗旦は千 少庵実子とのべる。		▲表千家 千宗旦母は千 利休娘といわれるとのべ る。	▲裏千家 千少庵妻のお 亀を千利休の先妻の実子 と位置付ける。	『三百五十年遠忌記念 元伯宗旦展』図録、表千 家北山会館発行、平成 十九年十月、六二頁 宗旦三百五十年忌記念 秋季特別展「千宗旦」図 録、茶道資料館発行、平 成十九年十月、二三四頁

はないが、この『わび』やその後身たる『茶道雑誌』において、さまざまな研究成果が次々と発表され、その結果、旧来の伝承にいろいろの一例として、くわしくはIII 1 (2) でのべるが、千宗恩の先夫すなわち千少庵の実父については、長らく松永久秀であるとされてき

た。ところが、昭和十九年に片山九郎右衛門は、千少庵の実父が能楽の小鼓打の宮王三入であるとの資料を紹介した¹⁶⁾。この新たな見解が、『茶道雑誌』における議論のなかで定説となっていく過程がみられる(表1参照)。このようにして、茶の湯における人物理解が進んでいったのである。¹⁷⁾

(2) 「利休血脈論争」とは何か

本稿でとりあげる千宗旦の出自をめぐる「利休娘実子説」と「道安実子説」との論争的な対立も、『茶道雑誌』に掲載された昭和三十年代の研究論文にはじまっている。その後も新たな研究成果、また、その反論が掲載されるなど、『茶道雑誌』が主な論争の舞台となった。ただし、かなりの長期間にわたること、論者も交代していることから、当事者に論争という意識があったかどうか定かではないが、これを「利休血脈論争」とよぶこととしたい。

この論争の概要は表2に整理したとおりである。さきに千宗旦の出自を「利休娘実子説」、「道安実子説」および「直系実子説」の三つの説にわけて紹介したが、これ以外にどちらとも判断できないとする「中立説」の立場がある。

この論争の根底には、千宗旦が千利休の血脈を受け継いでいるのかという教条的な問題がある。そのため、強引に歴史資料を解釈し、それを根拠として主張がなされたのである。あらかじめ指摘しておきたいことは、この論争は、それぞれ過去の文献の記述を再発見あるいは再評価することによってはじまり、展開していくのである。解釈の強引さもさることながら、意図的に編集あるいは改変されている可能性が高い歴史資料を無批判に用いたことにも大きな問題があったのである。

以下、この論争を年代順に六期に区分し、それぞれ主要な論者の主張を紹介しながら、この論争の経緯をみていくこととする。

II 「利休血脈論争」とその問題点

1 「利休血脈論争」の経緯

(1) 第一期(昭和二十九年(一九五四)～昭和三十二年(一九五七))
—「道安実子説」の再検討—

「利休血脈論争」の遠因となったのは、昭和二十九年に井口海仙が裏千家の機関誌である『茶道月報』¹⁸⁾において、

私は、宗旦が道安の実子であると云いたのである。¹⁹⁾

とのべたことである。井口海仙(本名井口三郎、明治三十三年(一九〇〇)～昭和五十七年(一九八二))は、裏千家第十三代千宗室(圓能齋)の三男として生まれ、実兄第十四代千宗室(淡々齋)を補佐しながら、茶の湯に関する執筆活動を盛んに行った。その意味では、茶の湯の世界において大きな影響力があった人物である。井口海仙は、その後もくりかえし「道安実子説」を主張する。²⁰⁾

「道安実子説」自体は、くわしくはIII 1 (2)でのべるが、『茶祖的伝』²¹⁾に明らかに記されている。また、昭和十年(一九三五)に吉田堯文が、昭和十五年(一九四〇)に西堀一三が、「道安実子説」²²⁾

の存在にふれるなど、以前から異説のひとつとして認識されていた。しかしながら、千宗且の末裔であり、裏千家の核に位置する井口海仙が「道安実子説」を強調したことによって、「道安実子説」はあらためて検討をせまられることとなった。

昭和三十二年（一九五七）、鈴木半茶は、

「実^{マコト}は道安の子なり」との異説もあるが、（略）宗且はやはり少庵の实子で、宗音のほんとの孫であったことが間違いなく肯定されてよいと思われるのである⁽²⁴⁾。

とのべ、また、同じ年に吉田堯文は、

宗且は利休居士の孫、二代少庵の嗣であり、少庵の实子である。古くより実^{マコト}は道安の子であるという異説もあり、最近に於てもこの説を唱えて居る人もある⁽²⁵⁾。

とのべるなど、井口海仙を意識した、「道安実子説」を否定する内容の論文があいついで『茶道雑誌』に掲載されたのも、その影響の大きさのゆえであろう。

(2) 第二期（昭和三十三年（一九五八）〜昭和四十三年（一九六八））
—「利休娘実子説」の登場とその広がり—

昭和三十三年に『茶道雑誌』において「利休娘実子説」を主張する論文が掲載される。そのころ千少庵に関する「少庵伝小藁」を連載していた鈴木半茶は、『茶道雑誌』昭和三十三年九月号において、『敝帚記補』巻十三、雑談五に、千少庵内室お亀は千利休の娘であるとの記述を発見したと紹介したのである。

少庵の妻については、利休の娘お亀であったということが「敝帚記補」に書いてあるのを初めて発見して、珍らしく更に瞠目せずにはおれなかった⁽²⁶⁾。

しかしながら、翌月号では、

ただ「敝帚記補」にあるこの一つの史料のみでは、全面的に納得し得ない恨みはある。（略）なおこの外にこの事実を裏付ける傍証が発見されることを期待するものである⁽²⁷⁾。

とあくまで慎重である。鈴木半茶自身、『敝帚記補』⁽²⁸⁾の内容がそれほど信頼できないことをよく承知していたこと⁽²⁹⁾、くわえて、他の歴史資料との整合性の問題もあることから、控えめな主張にとどめた

ものであろう。

ところが、昭和三十四年（一九五九）十一月号の『茶道雑誌』に掲載された「慶長八年春屋宗園賛利休坐像について」⁽³⁰⁾において、杉本捷雄は大胆な仮説を発表する。その主張の要点は二つである。

第一に、堀内長生庵蔵「春屋和尚賛赤頭巾利休坐像」には、慶長八年春屋和尚賛として「画宗易師人之肖像 其信女需賛語叨書」とある。この「其信女」は、千利休の娘と解すべきであるという主張である。そして、

それは先ず慶長八年生存していたことの明らかな人でなければならぬ。また利休とも最も交情の深かった娘でなければならぬ。そう考えて来る時、何んといつても先ず第一に指を屈しなければならぬ人は、「千家由緒書」にもその名の挙げられている「お亀」その人ということになって来るようで、またこれが動かせない所ではないかと思われる。

と判断している。お亀について、さらに検討を重ねて、

以上「其信女」―「利休の娘」は即ちお亀と称した人で、千家としては所謂嫡男の道庵を差置いて二代を継いだ先には女婿であり、後には養子となった少庵の妻、また千家中興の祖にし

て佗茶の完成者千宗旦その人の産みの親に当たる人ということになって来る。

と結論付けるのである。

第二に、表千家蔵「文禄四年銘同春屋和尚賛語伝長谷川等伯筆利休坐像」にある「常随信男宗慶」について、「この宗慶は近年現在の楽家の先祖に当たる人として研究せられている。」とのべ、

かりに宗慶を利休の子として文禄四年に六十であった人は利休十六才の折りの子ということになり、少し年齢が若い思いもある。

と躊躇しながらも、楽家の祖である田中宗慶を千利休の子とする考えを示したのである。

その後、杉本捷雄は、自説を補強し、批判に答えるため、昭和三十五年（一九六〇）「慶長八年利休像補遺」⁽³¹⁾、三十六年（一九六一）「文禄、慶長利休像余談」⁽³²⁾、三十八年（一九六三）「少庵内室のことども―亀女礼讃」⁽³³⁾と、つぎつぎに『茶道雑誌』に論文を発表したのである。

一方、その時点まで楽焼の研究から楽家の系譜を調べていた磯野風船子⁽³⁵⁾は、昭和三十五年（一九六〇）、『陶説』に「楽家系図表」⁽³⁶⁾を

発表した。このなかで、磯野風船子は、

田中宗慶が利休の子だと云う見解は、わたくしが唱えた新見解ではなく、杉本捷雄氏が「茶道雑誌」昭和三十四年十一月号に発表された見解である。わたくしは、杉本氏の意見が正しいと思つたので採り上げたのである。

と杉本捷雄の説に賛同を示し、

千家は、利休の正しい血を引いた後継者となり、楽家も利休の堂々たる子孫になるのである。

とのべ、現在の千家も、楽家も、ともに千利休の血脈を受け継いでいると主張した。

そして、昭和三十七年（一九六二）「侘び茶の誕生」³⁷、三十九年（一九六四）「少庵の父を文学的に考察する（一）」³⁸、「少庵の父を文学的に考察する（二）」³⁸を『茶道雑誌』に発表して、杉本説を擁護し、井口海仙の「道安実子説」を痛烈に批判した。³⁹

（3）第三期（昭和四十年（一九六五）〜昭和四十六年（一九七二）四月）
—あらたな論者たちの登場—

杉本捷雄および磯野風船子による一連の論文発表は、昭和三十九年（一九六四）までに一段落し、しばらく『茶道雑誌』における意見発表はみられない。杉本捷雄は、昭和四十五年（一九七〇）に自説の集大成として『千利休とその周辺』（淡交社、なお、昭和六十二年（一九八七）改訂再版）を刊行し、その年他界する。

その一方で、両説ともにあらたな論者が登場する。昭和四十四年（一九六九）に刊行された『京の茶家』のなかで林屋辰三郎は、

宗旦の父は、（略）利休の後妻宗恩の連れ子の少庵であったというが、それにはかなり年齢上の無理があり、伝記類のつたえる利休の実子道安という説をとりたい。⁴⁰

と「道安実子説」を主張したのである。「年齢上の無理」とは何をさすのか、林屋辰三郎自身説明していないが、井口海仙も「道安実子説」の根拠の第一として、

宗恩が、いかほど利休の気に入った婦人であつたからと云つて、息子夫婦に孫まで連れた婦人を、後妻に貰うということは、常識では考へられないことである。⁴¹

とのべているように、再婚時の千宗恩の年齢が高すぎるということであろう。

一方で、「利休娘実子説」の側には、村井康彦があらわれる。昭和四十六年（一九七二）三月に刊行された『千利休―その生涯と茶湯の意味』⁴²のなかで村井康彦は、

杉本氏の検討によって、少庵の妻は利休の女、お亀（おちゃう）であったことがほぼはっきりした。

と杉本説を承認する。そして、

なお従来、宗旦は少庵の子であるからそこで利休の血が断絶すると見て、宗旦の父は少庵ではなく、初め紹安といていた道安（利休実子）と混同されていたのではないか、といった議論がなされたこともあったが、宗旦の母がお亀とすれば断絶論そのものが消滅するわけである。

とのべている。ここでは「利休の血脈」が焦点であることを明らかにしたのみならず、「宗旦が道安の実子である」という「道安実子説」を、「道安と混同されていた」と内容を読み替えている。

ちなみに、第二期の論者である鈴木半茶、杉本捷雄および磯野風船子の三人は偶然にも、みな陶磁器の研究者であり、そこから千利休への関心、楽家への関心に移行しているのである。それに対して、第三期に登場した林屋辰三郎（大正三年（一九一四）〜平成十年（一九九八））および村井康彦（昭和五年（一九三〇）〜）は、日本史の研究者であり、この問題が本格的に歴史学の俎上にのぼることとなった。

（4）第四期（昭和四十六年（一九七二）五月〜同年十一月）

―『元伯宗旦文書』の衝撃と『道安実子説』の一時的復活―
昭和四十六年（一九七二）五月、『元伯宗旦文書』⁴³の刊行によつて、表千家に秘蔵されてきた数多くの千宗旦の手紙が公開された。

息子の仕官のために武家にも積極的に接触する千宗旦の姿が明らかとなり、生涯清貧に徹し、仕官を拒みつづけたという、従来の千宗旦像は大きな修正をせまられることとなった。⁴⁴

「利休血脈論争」に関係することでは、『元伯宗旦文書』に収録された千少庵筆「云置き」の文言が問題となった。数江教一は、「宗旦の父親」と題する資料紹介のなかで、千宗旦の父親は千道安であるという可能性を示したのである。千利休の実子千道安が家を継がずに、実子でない千少庵が継いだことについて、

そこから二つの推測が生まれた。一つは少庵の妻は利休の娘ではなかったかということ、他は宗旦は道安の実子ではないかということ、この二つである。(略)

それがこのたび不審庵の文書のなかから、右の疑問をとく手掛りになると思われる貴重な資料がでてきた。それは少庵が亡くなる五ヶ月前に玉室宛に書いた云置きである。

(略)ここに注目すべきは、「宗旦父」という表現がつかわれていることである。少庵が人にむかって自分のことを「宗旦父」というわけはない。そうすると「宗旦父」はすでに鬼籍に入っている道安と考える余地も生ずることになる。⁽⁴⁶⁾

この数江教一の控えめな主張により、急に「道安実子説」が浮上する。

井口海仙、中村昌生は、『茶道雑誌』昭和四十六年(一九七二)九月号に論文を発表し、それぞれつぎのようにのべたのである。井口海仙は、

『元伯宗旦文書』の巻末ちかくに、貴重な資料が発表されて、宗旦の実父が道安ではなからうかということ、資料的に実証されたが、この文書については、まだ研究の余地があると思うが、これまで宗旦は道安の子であると、説をまげなかつた私は、

なにかほつとしたような、心のやすらぎが感じられた。⁽⁴⁶⁾

また、中村昌生は、

宗旦は道安の子ではないかという説を、はやくから井口海仙宗匠が唱えてこられました。歴史学の林屋辰三郎先生もその説を採用しておられます。(略)今度、表千家の宗旦文書の大きな副産物として、少庵の玉室和尚宛書状(『表千家伝来宗旦文書』九二頁所載)が発見されました。その文中に「宗旦父月忌候ハ」と記されています。これによって宗旦の父は少庵以外の人であると考えうる可能性が著しく高まったように思います。(略)宗旦は道安の子であるという、かねてからの推論、仮説が、ますます捨て難いものになってきたことは確かであります。⁽⁴⁷⁾

さらに、同年十二月、林屋辰三郎も別のところで「道安実子説」について、

宗旦の父は利休の後妻宗恩の連れ子であった少庵といわれていたが、さいきん『元伯宗旦文書』の研究につれて、利休の実子道安の子という説が有力となってきた。⁽⁴⁸⁾

とのべたのである。

とくに、長らくきびしい批判にさらされてきた井口海仙は、「道安実子説」について「資料的に実証された」とし、「説をまげなかつた」と、あたかも勝利宣言ともいえる発言をするのである。

(5) 第五期(昭和四十六年(一九七二)十二月〜昭和五十三年(一九七八)一月)

―「利休娘実子説」の新展開あるいは混迷―

しかし、「道安実子説」が盛り返したのも、ほんの一時のことであつた。「利休娘実子説」派の磯野風船子は、突然荒唐無稽な説を主張しはじめた。表千家第四代千宗左(江岑)が後水尾天皇の御落胤であるというのである。

江岑は、東福門院の侍女といわれている宗見の子として、慶長十八年・一六一三年、東福門院が七歳の時産まれている。この時東福門院は入内していないし、宗旦も宮中には出入していない。とすると宗見は、東福門院の侍女ではなく、後水尾天皇の女官か、女官の誰かの侍女であつたのであろう。(略)東福門院が入内した時、宗見は八歳の子供を抱えながら侍女になつていた。こんなことは普通では考えられない。わたくしは江岑は、御水尾天皇の皇子だつたのではないか、と思う。天皇のお

子さんなら、宮中から追出されることがない。(略)残念ながら、江岑には実子がなかったから、家元は血こそつながつていないが、後水尾天皇の後裔ということになるかもしれない。⁽⁴⁹⁾

そもそも千宗旦の後妻宗見について、明らかかなことは少ない。⁽⁵⁰⁾磯野風船子の推論は、根拠もなく仮定の上に仮定を重ねるようなものである。ところが、磯野風船子はこの説をくり返し主張するのである。⁽⁵¹⁾ そのうえ、

お裏の有力な老宗匠のお話だと、江岑が後水尾帝のお子さんであるということは公然たる秘密で、口外を禁ぜられているので誰も話をしないのだ、と。戦後民主化された現在では、その秘密を守る必要はない。⁽⁵²⁾

これが証拠とされては、まったく議論にならない。ここまで暴走されると、「利休娘実子説」側にとつても危険な存在となつてしまうのである。⁽⁵³⁾

その一方で、「利休娘実子説」を新たに展開させるのが村井康彦である。磯野風船子が「利休娘実子説」の枠を越えて暴走したのに対して、村井康彦は、すでに昭和四十六年(一九七二)の『千利休―その生涯と茶湯の意味』のなかで主張していることもあるが、歴

史学者らしく、歴史的事実の整合をはかる議論を展開した。昭和五十二年（一九七七）から翌年にかけて『茶道雑誌』に連載された「少庵と道安」（その二）～（その六）がそれである。

たとえば、従来から千家は千道安ではなく、千少庵が相続したと考えられてきた。しかし、昭和になってから千道安への相続内容を示す千利休直筆の書置が発見されたことを受けて、村井康彦は、千道安が相続した堺千家と、千少庵がたてた京千家との併存説をとなえた。すなわち、

実子の道安には堺の千家をつがせるというのが、この時点での利休の気持ちであったと思う。これがのちに千家が京千家と堺千家とに分かれ⁽⁵⁵⁾

と論じて千道安が千利休のあとを継がなかったという考え方を修正した。

また、千宗恩が二人の子供を産んだことがあるという歴史資料から、

再婚時宗恩が五十歳前後というのでは、その後二子を生むのはいささか無理というものではないか。しかしこれを、利休と宗恩との「交渉」は先妻の生存中にはじまっていたと見れば、

以上の不自然さはいとも簡単に解消されるし、それが真相であろう。⁽⁵⁶⁾

と推測した。

さらに重要なことは、『元伯宗旦文書』に掲載された数江教一「宗旦の父親」に関する反論である。村井康彦は、川口恭子の指摘により、「宗旦父月忌」ではなく「宗旦若月忌」と読むべきであるとして、

数江氏の提出された「宗旦父」論は川口さんの指摘によってほぼ完全に雲散霧消してしまった⁽⁵⁷⁾

とのべ、千宗旦の父は千少庵であったとみるべきと結論づけたのである。

ただし、千宗旦の還俗時期と千宗旦の長男宗拙の出生時期とが矛盾する問題について、「利休娘実子説」にこだわるあまり、やや勇み足の議論もある。村井康彦の説明によれば、千宗旦は少なくとも文禄三年（一五九四）四月までは大徳寺にいたと考えられる。⁽⁵⁸⁾しかし、千宗旦の次男である千宗守は文禄二年（一五九三）生まれであり、さらに長男の千宗拙もいる。すなわち、千宗旦が大徳寺にいた時期に子供が生まれているという矛盾である。⁽⁵⁹⁾

この矛盾に対しての村井康彦の見解は、つぎのとおりである。

結局はそれぞれの事実をそのまま認める以外にはないだろう。

つまり宗旦は利休処刑後（略）もしばらくは大徳寺にあり、その間喝食から蔵主にも昇る（文禄二年～三年の間）一方、寺を出でては俗人としての時間をひそかに持っていた、ということであろう。⁽⁶¹⁾（傍線筆者）

村井康彦は、結果として若い千宗旦を、「破戒僧」にしてしまうのであるが、それは千利休の娘である千宗旦の母が推し進めたこととして正当化するのである。そもそも、この矛盾をさき指摘した筒井紘一も、

たとえ利休の眷族であるとはいえ、喝食である宗旦に子供をつくる機会を与えられるはずがない。⁽⁶¹⁾

と断言しているのである。

この第五期における村井康彦の役割は、最新の歴史学的研究成果を『茶道雑誌』で一般向けに紹介したこと、そして、好意的に解釈すれば、磯野風船子による「利休娘実子説」の暴走を、理知的な線で押しとどめようとしたと評価できるだろう。しかし、千宗旦の次

男千宗守（一翁）の出生が文禄二年（一五九三）であるというのは、のちに新資料の発見でくつがえされることとなる。⁽⁶²⁾ 歴史の後知恵ではあるが、この部分の村井康彦の議論は「利休娘実子説」にこだわらぬあまり、やはり無理があつたように思われる。それはともかく、歴史学者である村井康彦によって、「利休娘実子説」は事実として広く認められるに至るのである。

（6）第六期（昭和五十三年（一九七八）二月以降、現在まで）

―熱意のうすれと議論の多様化―

この時期になると、議論が学問的になる一方で、強硬な主張を行う論者がいなくなり、熱が冷めていく感がある。その結果、『茶道雑誌』を舞台とする意見発表も限られたものとなる。さすがに「道安実子説」を主張する論者はあらわれないが、その反面、三種類の議論が行われるようになる。まず、論者の多くは「利休娘実子説」を当然の前提として議論する姿勢をとった。これが多数説といえよう。その一方で、無理のある「利休娘実子説」に対して、別の視点からの批判があらわれた。その一つが「中立説」の主張である。これは有力な反対説といえる。さらに、「直系実子説」という少数説もみられた。

まず、この時期に「利休娘実子説」によつた研究者としては、小松茂美、米原正義、矢部誠一郎らがあげられる。これらの議論は、

「利休娘実子説」の結果を前提としたもので、あらたな材料はない。たとえば、小松茂美は、

諸書の記載を総合的に判断すると、お亀は、宗恩が利休に再嫁した際、すでに少庵と結婚していた義理の娘「おちやう」と同一人物である可能性が高い。⁽⁶³⁾

と断定は避けているが、従来の議論の域を出るものではない。⁽⁶⁴⁾

米原正義は、利休年譜のなかで、

天文五年 田中宗慶生まれる。父は一説に利休という。

天正六年 孫の宗且生まれる。父は少庵、母は利休の娘お亀か

という（異説あり）⁽⁶⁵⁾。

と記しているが、これは自説の主張というよりは、通説の紹介である。矢部誠一郎も、通説を整理して紹介している。その結果、

利休の妻となった女性は三人いたと考えられている。先妻の宝心妙樹、後妻の宗恩、そして今一人姓名不詳の人物である。⁽⁶⁶⁾

というように、「三人の妻」という当然の帰結をはっきりと表現したことが目新しい。

ついで、この時期にはじまる「中立説」について紹介する。この考え方による議論で注目されるのは、『茶道雜誌』昭和五十三年二月号に掲載された清瀬ふさ子の「千少庵筆『云置き』のこと」である。前記（5）で紹介したとおり、村井康彦は、数江教一「宗且の父親」を批判して「宗且若」という読み方を主張した。これに対して、『元伯宗且文書』の解説にたずさわった清瀬ふさ子が見解を示したものである。清瀬ふさ子は、「宗且父」であるのか「宗且若」であるのかを、「筆の運び方から見ても気持は『父』の方へ私は読みたいのだが⁽⁶⁷⁾」といいつつも、慎重である。さらに、「宗且父」であるとしても、いくつかの解釈があることを比較検討して、結局は、

問題となつている宗且の父親について、これを道安とも少庵ともすることは難しく、今のところ、私にとっては疑問のままである。⁽⁶⁸⁾

とのべるにとどまっている。ものたりなく思えるが、判断できる材料がない以上、わからないとするのが「中立説」の考え方である。同じころ、芳賀幸四郎は『わび茶の研究⁽⁶⁹⁾』のなかで、

宗旦は実は少庵の子でなく利休の実子道安の子であるという説があり、また少庵が母宗恩とともに千家にはいる以前に、すでに利休の女の亀女を娶り、その間に宗旦が生れたのである、という説もある。

と、「道安実子説」および「利休娘実子説」をそれぞれ紹介したうえで、

これを決定的に否定するだけの証拠もないが、これらの説はどうも疑わしい。少庵が宗恩と宮王太夫（一説には松永久秀）との間に生れた子であることがたしかである以上、もしその妻が他家の出であるとすれば、宗旦には利休の血が流れておらず、したがって千家のどこにも利休の血が伝わっていないことになる。そこで千家と利休との間に血のつながりをつけるために、これらの二説が作為されたのではなからうか。

と喝破し、

宗旦の母が利休の女の亀女だという説は、一応よくできているが、江岑宗左が不明なことは父宗旦にたずねて書いたという

『千利休由緒書』には、(略)少庵に嫁したという亀女のごとは全くでてこない。この『由緒書』は江岑宗左が宗旦に不審を訊いて書いたのであるから、もし宗旦の母が利休の女であるならば、それを逸することはあるはずもない。故意に作為された説だと断定するゆえんである。

と、両説とも疑わしいという「中立説」の立場を主張した。この「中立説」の流れは、その後中村修也⁽²⁰⁾、熊倉功夫⁽²¹⁾によって踏襲される。

さらに、あらたな議論として、「直系実子説」が登場する。この論者の千原弘臣は「利休娘実子説」を批判して、

少庵内室の俗名は「おちやう」である。少庵の妻を利休息女お亀とする説の根拠は明らかでない。宗旦の高弟山田宗徧はお亀を少庵の妹と「茶道要録」に書き、江岑はお亀を万代屋宗安室とする（千利休由緒書⁽²²⁾）。

とのべ、資料解釈の誤りを指摘する。⁽²³⁾

その一方で、

少庵の真父は千宗易であろうか。

少庵は利休の血縁の子であったとの想いを深める。

筆者は少庵の真父は三人でなく、千利休であったであろうとの推測をますます強める。

少庵が事実をもって利休の茶を相続したのには利休との血縁の存在を想わせる。少庵は利休の実子⁽⁷⁴⁾。

というような主張をくり返すのである。しかしながら、その根拠はあまり明確なものではない⁽⁷⁵⁾。

このような状況は現在までつづいていると考えられる。「利休娘実子説」が通説的立場であり、千少庵妻は千利休娘「お亀」であるとは一般には理解されている。しかし、結論を出すには根拠が不十分という「中立説」の考え方も歴史学者の間では依然として根強い。このため、I 1 (2) でみた表千家の図録のように、「千宗旦、少庵の長男として生まれる。母は利休の娘といわれる」というようなあいまいな表現が用いられているのである。

2 「利休娘実子説」の構造

(1) 「利休娘実子説」に肯定的な三つの資料

「中立説」および「直系実子説」という「利休娘実子説」を批判する考え方の登場をみたところで、「利休娘実子説」の内容をあらためて検討してみる。

議論を整理するため、「利休娘実子説」の主要な三人の論者、鈴木半茶、杉本捷雄、村井康彦の主張をまとめてみると、表3のとおりとなる。

ここで焦点となる資料は五点ある。「利休娘実子説」にとって肯定的な資料が三点、否定的な資料が二点、これらの資料をどのよう⁽⁷⁶⁾に解釈することによって「利休娘実子説」が導き出されるのかを検証する。

まず、前者の肯定的な三つの資料は以下のとおりである。

① 『千利休由緒書』

表千家第四代千宗左（江岑）による千利休の由緒および千家系譜の覚書である。承応二年（二六五三）、幕府が徳川家康の年譜を編纂するにあたり、紀州徳川家を通じて千利休に関する事柄の照会があり、千宗左（江岑）が千宗旦と相談のうえ、口頭および文書で回答したものをまとめたものと考えられる。写本が表千家、内閣文庫⁽⁷⁷⁾に所蔵されている。

このなかで、千宗左（江岑）は、千利休が京都から堺に追放になる際のこととして、つぎのようにのべている。

利休めはとかく果報のものぞかし

菅丞相になるとおもへハ

右の一首ヲ豎紙ニ書テ、卷納メ、封目ヲ付、上書ニお亀におも

ひ置利休と書て、お亀に渡候へとて出候。お亀ハ利休娘、万代屋宗安か後家也。⁽⁷⁸⁾

② 『茶道要録』

千宗旦の弟子の山田宗徧が著した茶書であり、元禄四年（二六九一）版行されたものである。このなかに利休伝があり、上記と同じ状況のこととして、つぎのような記述がある。

利休メハトカク果報ノ者ソカシカンシヤウセウニナルト思ヘハ

ト堅紙ニ記シテ卷テ上ニ封目ヲ付テ、於亀ニ思置利休ト書テ、於亀ニ渡候ヘトテ出ル、於亀ト云ハ居士カ娘少庵ガ妹ナリ、即此真筆我ガ四方庵ニ所持スル者ナリ⁽⁷⁹⁾

③ 『敵帯記補』

松尾宗二（松尾家第六代、延宝五年〔二六七七〕～宝暦二年〔二七五二〕）の著書とされる。⁽⁸⁰⁾ 鈴木半茶がそれほど信頼できるものではないと考えていたことは、II 1（2）でのべたとおりである。杉本捷雄によれば、つぎのように記されているという。

庚午冬（寛延三年）宗室ノ口切かけ物ニ、少庵内よりトアル

女筆ノ文也。是ハ千家ニテモ利休ノ娘ト云フ。未詳ニテ分明ニ不知、是ハ利休ノ愛女ニテ名ハ亀ト云、法名ハ喜室宗慶ト号ス。少庵ノ妻也。是人ノ不知事也。⁽⁸¹⁾

この三つの資料について、その要点を表4に整理する。

①から③の資料は、いずれもお亀が千利休の娘であるとのべている（情報A）。一方で、お亀については、「万代屋宗安か後家」「少庵ガ妹」「少庵ノ妻」とそれぞれ異なることをのべている（情報B）。これをどのように評価するのが問題である。「利休娘実子説」（すなわち、「お亀」＝「千利休娘」＝「少庵妻」）をとるためには、「少庵ノ妻」を正しいとして、他を否定しなければならぬ。これは時代が下がる資料ほど正しいと主張することである。事実、まさにそのとおりの主張をしたのである。

まず、『千利休由緒書』の「万代屋宗安か後家」について検討する。

鈴木半茶は、

お亀は万代屋宗安が後家であるとは誤りであるらしい。

△利休女子、泉州堺二住、万代屋宗安妻お三。母ハ利休先妻ノ子、後家トナリ家ニ帰ル。父ニ先テ自殺ス。（千家系譜）

とあるのが本当であろう。⁽⁸²⁾

	否定的な資料	
③『敝帚記補』 松尾宗二 (松尾家第六代、1677～1752) 著	④「おちやう宛の文」 天正十二年 (1584)	⑤『茶道四祖伝書』 松屋久重編 正保四年 (1647)～慶安五年 (1652) 成立か
「庚午冬 (寛延三年) 宗室ノ口切かけ物ニ、少庵内よりトアル女筆ノ文也。是ハ千家ニテモ利休ノ娘ト云フ。未詳ニテ分明ニ不知、是ハ利休ノ愛女ニテ名ハ亀ト云、法名ハ喜室宗慶ト号ス。少庵ノ妻也。是人ノ不知事也。」	「むらさきのせうあんよりきたり候きんすぢまい参らせ候 已上天正十二年十二月廿一日 そうゑき 花押 おちやうへ 参る」、千宗室 (仙叟) の添書に「おちやうは少庵妻女也 後法名喜室宗慶と申候」	「少庵も御成敗トノ儀也。(略) 此一乱ニ付宗旦ノ母其儘飛入て、少庵ハにくけれども、宗旦同事ニ果可申とて籠居けり。」
「少庵の妻は利休の娘お亀であるというのである。」(同論文 54 頁)	「この宛名のおちやうというのは、少庵の妻であるならば、前のお亀とは別人となるので解釈に苦しむ」(同論文 56 頁)	「お亀であれば利休の娘であるので、一時離別のことは考えられないし、少庵とは離別のお亀に利休が書置のことも変な話である。」(同論文 56 頁)
「少庵内室は、利休居士の娘で、その俗名をお亀といった人であったことが分る。」(後者論文 88 頁)	「お亀の略字と平仮名書きとの混乱ではないだろうかと思う」、「古写に属するもので、本文の宛名の『お亀』の略字と、『おちやう』のそれが混乱を起したのではなからうか」(後者論文 90 頁)	「時点は会津の蒲生氏郷に預けられた少庵の赦免直前頃の話」、「正妻の腹ではなく、元々は千家の籍にも入っていなかった人であろう。」(後者論文 93 頁)
「少庵内室は、利休居士の娘で、その俗名をお亀といった人であったことが分かる。」(同書 136 頁)	「これをお亀の幼名でないかという人もある。」、「この書簡が、利休自筆のものであるかどうか、(略)あるいは書き手の違う代筆者鳴海の場合とすれば、これに幼名『お長』を何気なく (略)書いたとしても、あり得ないことではない」(同書 138～139 頁)	「時点は会津の蒲生氏郷に預けられた少庵の赦免直前頃の話」、「正妻の腹ではなく、もともとは千家の籍にも入っていなかった人であろう。」(同書 142 頁)
「事実とすればお亀は利休の可愛がっていた娘であり、少庵の妻となり、法号を喜室宗慶 (桂) といったことが知られるのである。」(前者論文 97 頁)	「『お亀』と『おちよう』とは同一人物ということになる。後者が早い時期の名であったのであろうか。」(前者論文 97 頁)	「利休処刑時のこととすべきであって、少庵が赦免される時のことではあり得ない。」(前者論文 95 頁)

表3 「利休娘実子説」の主張比較表

資料の評価		肯定的な資料	
論者	出典	①『千利休由緒書』 千宗左(江岑)、承応二年(1653)成立か	②『茶道要録』 山田宗徧(千宗旦門)著、元禄四年(1691)版行
		「利休めはとかく果報のものそかし菅丞相になるとおもへハ 右之一首ヲ豎紙ニ書テ、卷納メ、封目ヲ付、上書ニお亀におもひ置利休と書テ、お亀に渡候へとて出候。お亀ハ利休娘、万代屋宗安か後家也。」	「利休メハトカク果報ノ者ソカシカンシヤウセウニナルト思へハ ト豎紙ニ記シテ卷テ上ニ封目ヲ付テ、於亀ニ思置利休ト書テ、於亀ニ渡候ヘトテ出ル、於亀ト云ハ居士カ娘少庵ガ妹ナリ、即此真筆我が四方庵ニ所持スル者ナリ」
鈴木半茶	「少庵伝小藁(その五)」『茶道雑誌』昭和三十三年(1958)九月号	「お亀は万代屋宗安が後家であるとは誤りであるらしい。」(同論文55頁)	「宗徧がお亀を少庵の妹といているが、この外に誰の妻とて明かしてない」(同論文55頁)
杉本捷雄(論文)	「慶長八年春屋宗園賛利休坐像について」『茶道雑誌』昭和三十四年(1959)十一月号、「少庵内室のことども一亀女礼讃一」『茶道雑誌』昭和三十八年(1963)十一月号	「宗安妻については、『千家系譜』に、利休女子、泉州堺ニ住、万代屋宗安妻お三、母ハ利休先妻ノ子、後家トナリ家ニ帰ル。父ニ先チ自殺ス。 とあって、お亀とお三の混同を訂正してくれている。」(前者論文8頁)	「『妹』の字は『言海』によれば(略)大体男から見た妻であり、この例は『万葉集』相聞之歌にも『妹(いも)』『吾妹児(わぎもこ)』として随所に実例を見る」(前者論文8頁)
杉本捷雄(単行本)	『千利休とその周辺』淡交社、昭和四十五年(1970)	「(万代屋云々は誤り)」(同書136頁)	「妹(いも、注、妻)」(同書136頁)
村井康彦	「少庵と道安(その四)」『茶道雑誌』昭和五十三年(1978)一月号、「少庵と道安(その五)」『茶道雑誌』昭和五十三年(1978)二月号	(記述なし)	「『茶道要録』の「少庵が妹」も、義理の妹にもなるが妻の意とした方がよいだろう。」(前者論文97頁)

と否定するのである。この見解は、杉本捷雄にも踏襲され、

宗安妻については、「千家系譜」に利休女子、泉州堺二住、
万代屋宗安妻お三、母ハ利休先妻ノ子、後家トナリ家ニ帰ル。
父ニ先チ自殺ス。

とあって、お亀とお三の混同を訂正してくれている。⁽⁸³⁾

と判断し、同じく『千家系譜』をその根拠とする。

ところが、これらの引用は重大な誤解をまねきかねないものである。杉本捷雄は、「利休女子、泉州堺二住、万代屋宗安妻お三、母ハ利休先妻ノ子、後家トナリ家ニ帰ル。父ニ先チ自殺ス。」と一連の記述であるかのように記している。しかし、原典によれば、「利休女子 泉州堺二住 万代屋宗安妻」が当初記された内容であり、その左側に別の手でごく小さく「お三、母ハ利休先妻ノ子、後家トナリ家ニ帰ル、父ニ先テ自殺ス」と書き込みされているのである。これらは一括して論じるべきものではない。

また、『千家系譜』とは、十九世紀初めの資料である。それによつて十七世紀中頃の資料（『千利休由緒書』）を否定するのである。もちろん、『千利休由緒書』が信頼できない資料であるならば、それもありえるが、千利休の孫と曾孫とが相談して残した資料が、そ

表4 「お亀」にかかる情報と評価

資料名	資料の成立時期		「お亀」について		情報Bに対する評価
	情報A	情報B	情報A	情報B	
『千利休由緒書』	利休娘	万代屋宗安か後家	十七世紀中頃	×	村井康彦 (言及なし)
『茶道要録』	居士カ娘	少庵ガ妹	十七世紀末	?	△妹 妻
『敵帯記補』	利休ノ娘	少庵ノ妻	十八世紀中頃	○	○正しい

れより百五十年あとの資料よりも信頼できないとは、常識的には考えにくい。

なお、村井康彦は、この点について何もふれていない。

つぎは、『茶道要録』の「少庵ガ妹」の問題である。ここでいう「妹」について、鈴木半茶は、

宗旦の弟子宗徧がお亀を少庵の妹といっているが、この外に誰の妻として明かしてないのは、まことに残念であった。⁽⁸⁵⁾

とのべて、「妹」を素直に女兄弟の意味に理解している。

しかし、杉本捷雄は「妹||妻」の解釈を持ち出すのである。昭和

三十四年（一九五九）の論文では、

「妹」の字は「言海」によれば次の二つの意味がある。即ちその一は「男ヨリ女ヲ親ミ呼ブ称」とその二は「イモウト」。前者は大体男から見た妻であり、この例は「万葉集」相聞之歌にも「妹（いも）」「吾妹児（わきもこ）」として随所にその実例を見るものである。⁽⁸⁶⁾

と、いちおうの判断根拠を示しているが、のちの昭和四十五年（一九七〇）の単行本では、何ら検討することなく、

『茶道要録』（付冊の利休伝に）

お亀というは居士が娘にして少庵が妹（いも、注、妻）なり。⁽⁸⁷⁾

と引用文中に「（いも、注、妻）」と書き添え、それで済ませている。そして、村井康彦もその結論を追認する。『敝帚記補』の記述を紹介し、

事実とすればお亀は利休の可愛がつていた娘であり、少庵の妻となり、法号を喜室宗慶（桂）といったことが知られるのである。とすれば『茶道要録』の「少庵が妹」も、義理の妹にも

なるが妻の意とした方がよいだろう。⁽⁸⁸⁾

とのべている。

この問題にもう少し立ち入ることとする。いったい『言海』にはどのように記されているのだろうか。関係部分をかかげると以下のとおりである。

（いも（名）**困**（二）（男ヨリ女ヲ親ミ呼ブ称。（二）イモウト。

いもうと（名）**困**〔妹人ノ音便〕女ノ子ノ後ニ生レタルモノ。

イロト。（姉ニ対ス）又姉ニモ通ジテイヘリ。（妹ノ条ヲ見合ハスベシ）⁽⁸⁹⁾

これによれば、杉本は、「いもうと」ではなく、「いも」の意味だけを採用していることは明らかである。

ここでの「妹」が「いも」か「いもうと」かの問題はさておき、検討すべきは、「妹」が万葉集の時代ではなく、江戸時代初期にどのような意味であったかであろう。慶長八年（一六〇三）に刊行された『邦訳 日葡辞書』にはつぎのとおりある。

I m o . イモ（妹）詩歌語 すなわち、女・妻 ※いも…女

の事也、妹(いも)(匠材集、一)

I m o t o . イモト(妹)妹⁽⁹⁰⁾

すなわち、当時「いも」は詩歌語とされていたのであり、「いもうと」は女兄弟の意味で用いられていたと考えられる。このようにみてくると、「少庵が妹」は、「妻」と解するよりは、女兄弟である「妹」、この場合は「義理の妹」の意味となるが、そう解するのが、国語学的には妥当であろう。実際、義理の妹と解釈して、なんら矛盾はないにもかかわらず、あえて可能性の低い解釈をするならば、その根拠が必要である。

「利休娘実子説」に批判的な中村修也は、

妹(イモ)には妻や恋人の意味があることはよく知られているとおりである。しかし、多くの場合、男性からその対象の女性をさして呼ぶ場合に使用され、このような第三者の記述に、妻や恋人の意味で使用されることは通常ない。⁽⁹¹⁾

とのべるが、もっともである。

(2)「利休娘実子説」に否定的な資料(一)

それでは、「利休娘実子説」に否定的な資料をどのように解釈しているのかをみることにする。

④「おちやう宛の文」 天正十二年(二五八四)

これは、吉田堯文が、『わび』昭和十五年七月号に「おちやう宛の文」⁽⁹²⁾として紹介した千利休の手紙である。文面は簡単で、つぎのとおりである。

むらさきのせうあんよりきたり候きんす

壺まい参らせ候 已上

天正十二年十二月廿一日 そうゑき 花押

おちやうへ

参る

なお、この手紙には、家原自仙の手紙がともなっているが、それに裏千家第四代千宗室(仙叟)は、「おちやうは少庵妻女也 後法名喜室宗慶と申候」と書き入れている。ここで問題となるのは、この千宗室(仙叟)の添書に「おちやう」が千少庵の妻の名とされていることである。

鈴木半茶は、

この宛名のおちやうというのは、少庵の妻であるならば、前のお亀とは別人となるので解釈に苦しむのである。おちやうがどんな関係の婦人か、またはお亀の別名であったのか、全く知る由もないことは残念である⁽⁹³⁾。

と率直に語っている。

しかし、杉本捷雄は、昭和三十年代の論文において、

「おちやう」については、本歌をたしかめるすが今ないので、これは「ちやう」の字を「亀」の平仮名と読み間違えたものではなからうかと推量されるばかりである⁽⁹⁴⁾。

と端から否定的である。そして、のちに図版を掲載したうえで、

「わび」誌に掲載されている図版は、これをよく見ればみるほど、文字としては、やはり「おちやう」と読むのが正しいように思われる。しかし、お亀の略字と平仮名書きとの混乱ではなからうかと思う私の考えは依然として変らない⁽⁹⁵⁾。

とあくまでも自説に固執し、つづけて、

おちやうの本字は、(略)女性の俗字として考えられるもつとも穏当な字は、やはり「お蝶」を除いては考えられまい。そこで、少庵の「少」を「せう」と平仮名で書き、宗易の「宗」を「そう」と正しい旧仮名遣いで書いている宗易の平仮名としては、お蝶の「蝶」の字は「てふ」と書かれるべきで、「ちやう」とは書けない筈である。

と、一見もつともらしい議論を展開して、結論として、

私はやはり本書簡が、あるいは利休の書簡に少なくないと思われる古写に属するもので、本文の宛名の「お亀」の略字と、「おちやう」のそれが混乱を起したのではなからうかと思われて仕方ないのである。

と、この書簡が「写し」である可能性を示唆する。

ところが、昭和四十五年(一九七〇)の単行本では、「おちやう」が何らかの誤りという結論は同じながら、主張の内容は大幅に変更されている。

「おちやう」の本字は「お長」と考えられるが、(略)これを
お亀の幼名ではないかという人もある⁽⁹⁶⁾。

と「お蝶」説を「お長」説にあらため、さらに他人の説と称して「幼名」説をもちだすのである。

この書簡が、利休自筆のものであるかどうか、(略)あるいは書き手の違う代筆者鳴海の場合とすれば、これに幼名「お長」を何気なく天正十二年に思い出すまま書いたとしても、あり得ないことではないように思われる。

と、「写し」という説明から「右筆書き」という説明に変更している。

なお、杉本捷雄は、古写であるとか、鳴海の代筆とか、千利休自筆でない可能性を強調するが、小松茂美は、『利休の手紙』のなかでこの手紙を、「利休の最も確かな筆跡の基準となる。」と評価しているものであることを指摘しておきたい。

では、村井康彦は、この「おちやう苑の文」についてどのような評価しているのであろうか。

これによれば「お亀」と「おちやう」とは同一人物ということになる。後者が早い時期の名であったのであろうか。

と、とくに根拠を示すこともなく、杉本捷雄の説明を受け入れている。

長々と議論を引用したが、この「お亀」と「おちやう」とは、同一人物であるとする強引な議論が行われてきたことを示したいがためである。「利休娘実子説」をとった他の論者もこのことを真摯に検討したとはいいたい。

もちろん、筆者は、女性の改名がまったくないことを主張しているわけではない。しかしながら、安易に「幼名」と推測することに對して、一般的には可能性が低いということは指摘しておきたい。

(3) 「利休娘実子説」に否定的な資料(二)

もうひとつの「利休娘実子説」に否定的な資料を検討する。

⑤ 『茶道四祖伝書』の記事

『松屋日記』あるいは『松屋筆記』とも題され、現在では『茶道四祖伝書』とよばれる奈良の松屋の記録のなかに、「利休居士伝書」がある。この書物自体は、正保四年(一六四七)から慶安五年(一六五二)の間に松屋久重によって順次整理されたものと考えられている。百数十年におよぶ『松屋会記』を残した松屋のことであるから、同時代の記録も編集材料として用いたことであろう。また、「利休居士伝書」には、「慶安二(己)丑年卯月五日從千宗旦伝授之」とあることから推測できるように、内容もかなり信頼度が高

いと考えられる。

さて、このなかに千利休自刃について記したあと、つぎのような記述がある。

少庵も御成敗トノ儀也。少庵ノ内方宗旦の母ハ、何事も沙汰無之以前ニ去られたり。少もかまひハ無之候へども、此一乱ニ付宗旦ノ母其儘飛入て、少庵ハにくけれども、宗旦同事ニ果可申とて籠居けり。然処ニ少庵御免被成相済候也。女ノ処存無比類事と世上ニ云り。自一期被居候なり。¹⁰⁶

どういう訳か、このとき、千宗旦の母親は千少庵と別居状態で、子の千宗旦とも離れていたことになる。千利休に連座して千少庵も処罰されると聞いて、家を出ていた千少庵の妻で千宗旦の母は、あわてて千家に帰ってきて、千宗旦と家に立て籠もったというのである。

中村修也は、この記録を当然に天正十九年（二五九二）千利休自刃時のできごととした上で、つぎのようにのべている。

少庵と別居していた宗旦の母を、これまで無条件で利休の娘と考えてきたが、いささか疑問が生ずる。なぜなら、少庵と別居した利休の娘は、いったいどこに住んでいたであろうかと

いう疑問である。

もし、この宗旦の母が利休の娘ならば、少庵と離縁した後は、実家である堺の利休屋敷に住んでいたはずである。それならば、利休が秀吉の命で堺に蟄居した際に、いろいろと千家内で相談があり、事態に対する対応策や利休の覚悟なども、充分理解していたはずで、「此一乱ニ付宗旦ノ母其儘飛入」というような、無分別な行動にはでないのではないかと考える。（略）

言い換えるならば、宗旦の母とされる女性が他所にいて、「少庵も御成敗」の噂を聞きつけなければならぬ状況にあるということは、この女性が利休の娘ではないという可能性を示唆するものである。¹⁰⁷

鈴木半茶も、同様の疑問を感じたらしく、つぎのようにのべている。

その人がお亀であるか、お亀であれば利休の娘であるので、一時離別のことは考えられないし、少庵とは離別のお亀に利休が書置のこと（筆者注…①の「お亀におもひ置」の文）も変な話である。これはどう考えてよいものか、判談に苦しむのである。¹⁰⁸

ところが、杉本捷雄は、まったく異なった状況の話として理解し

ている。

時点は会津の蒲生氏郷に預けられた少庵の赦免直前頃の話で、少庵赦免状がでたのが文禄三年（筆者注…一五九四）十一月十三日であるから、その直前である。少庵の内方宗旦の母はすなわち利休娘お亀その人で、少庵に嫁し、後（天正十年）に宗恩が利休の後妻に入った折に、養子に入った少庵とともに千家に帰った人で、利休処刑のことのあった以前に去られたというのは、正妻の腹ではなく、元々は千家の籍にも入っていない人であろう。宗旦は天正十六年後半頃、十一歳の折、大徳寺に入って春屋和尚の膝下にあつて、すでに文禄三年には十七歳、僧籍も喝食から蔵局（主）にまで進んでいたが（一黙稿）これも危いのではないかという噂に、母お亀が本法寺前少庵屋敷に飛入り、そしてこれ呼び戻して、守り籠っていたといふのである。¹⁰⁹

原文の切迫した緊張感に比べ、「飛入」という必然性も理解できないし、なんとも間延びした印象を受けざるをえない解釈である。

さて、村井康彦は、この問題について、「利休処刑時のこととすべきであつて、少庵が赦免される時のことではあり得ない。」と杉本捷雄の理解を否定する。しかしながら、『茶道四祖伝書』の記事

に対して何ら疑問も矛盾も指摘していない。

（4）「利休娘実子説」の根拠の脆弱性

「利休娘実子説」の内容を検討するため、鈴木半茶、杉本捷雄、村井康彦の三人の議論を整理して比較検討してみた。「お亀」＝「千利休娘」＝「千少庵妻」の仮説が、強引な推論であることは十分明らかであろう。

「利休娘実子説」は、現在では通説的理解であり、茶の湯あるいは歴史学の研究者であつても、それを大前提として議論を進めることが一般的に行われている。「お亀」＝「千利休娘」＝「千少庵妻」の仮説にさかのぼって検討が行われることは少ないし、再検討している場合でも、通説であるという理解から、是認しがちな傾向にある。前提となる議論にこのような疑義があるならば、その上にいくらか精緻な議論を積み重ねても、砂上の楼閣というものである。もちろん、あらたな一次資料が発見されて、この仮説が立証される可能性がないわけではない。

III 「利休血脈論争」の意味と評価

1 議論の混乱の原因—近世における千家関連資料の潤色

（1）近世における千家関連資料

このようにさまざまな見解があらわれ、議論が混乱した原因につ

いて考える。「利休娘実子説」にしても、「道安実子説」にしても、「直系実子説」にしても、これらはすでに近世にあらわれていた見解である。それを反映した資料を、それぞれ論者が発見するなり、分析するなりして主張したのである。そもそも資料自体に矛盾があるのである。

そこで、千家に伝来する資料、千家の人物または千家に関係の深い人物の手になる資料において、本稿で論じてきた千利休の家族に関する情報がどのように記されているのだろうか。おおむね年代順に整理してまとめてみると、表5のとおりとなる。以下、資料を順に説明する。

① 『茶道四祖伝書』¹¹⁾

松屋久重編 正保四年（一六四七）〜慶安五年（一六五二）成立
か

II 2 (3) ⑤で紹介したとおり、『松屋会記』をはじめとする多くの記録が松屋に伝来し、しかも、千宗旦から直接聞いたとされる情報をふくめて、松屋久重が編集したものである。内容としてはかなり信頼度の高い資料と考えられる。

② 『千利休由緒書』

表千家第四代千宗左（江岑）述、承応二年（一六五三）成立か

II 2 (1) ①で紹介したとおり、承応二年の表千家第四代千宗左（江岑）による千利休の由緒および千家の系譜の覚書である。本文

は、「御尋」に対して回答している部分が承応二年、「逢原（源）齋口上三而」から「右是迄古宗左老物語」までの部分は、遅れて寛文六年（一六六六）に成立したものと考えられる。¹²⁾

また、内閣文庫本と表千家本とでは若干内容が異なる。表5では両方の内容を示すが、「内閣文庫本の方がウブな印象である」とされるので、それを先行するものとして併記する。大きな相違点としては、内閣文庫本は、「逢源齋口上三テ」¹³⁾以下のお亀の文を含む千利休自刃の際の話、「利休系図 此系図ハ鴨居善兵衛方より写ス」および「秀頼公御小姓組古田九郎八直談十市縫殿助物語」を欠いていることである。

③ 随流齋『寛文八年本』¹⁴⁾

表千家第五代千宗佐（随流齋）の筆になるものと推定される茶書。寛文八年（一六六八）成立。千宗佐（随流齋）は当時十九歳である。原本は表千家所蔵。

④ 『随流齋延紙ノ書』¹⁵⁾

同じく表千家第五代千宗佐（随流齋）が晩年に書き残したものの。貞享三年（一六八六）以降に成立したものと推定される。原本は表千家所蔵。

⑤ 『茶祖的伝』¹⁶⁾

表千家第八代千宗左（啐啄齋）門下である稲垣休叟（明和七年（一七七〇）〜文政二年（一八一九））が著したもので、写本が伝わる。

千利休の子供の説明						備考
石橋良叱妻	万代屋宗安妻	千紹二妻	円乗坊妻	清蔵主	お亀	
女子①	女子②	女子③	女子④	×	× (狂歌のみ記載)	松屋久重編 正保四年(1647)～慶安五年(1652)成立か
女子②	女子③	女子①	×	×	×	表千家第四代千宗左(江岑)、承応二年(1653)成立か。子供の順番について、内閣文庫本は本文中、表千家本は利休系図による。
女子①	女子③	女子②	×	×	お亀の文「お亀ハ利休娘、万代屋宗安か後家也」	
?	?	?	?	?	?	表千家第五代千宗佐(随流齋)、寛文八年(1668)成立(一部の情報しかない。)
×	×	×	×	×	×	表千家第五代千宗佐(随流齋)著、貞享三年(1686)以降成立
女子③	女子② 「幼名をお三といふ。」	女子①	女子④	「別腹の隠子也」	お亀の文「居士の息女にして少庵の妹也」	表千家第八代千宗左(碎啄齋)門下の稲垣休叟(明和七年〔1770〕～文政二年〔1819〕)著
女子②	女子①	×	×	×	×	表千家第九代千宗左(了々齋)、文化元年(1804)成立
「吟子、母ハ先妻」	「お三、 「先妻ノ子」	「利休ノ女、別腹ノ子、此譜ニ不載」	×	「別腹ノ子」	「又お亀ト云女ハ少□□(庵妻?)」	表千家第九代千宗左(了々齋)没(文政八年〔1825〕)後成立

表5 千家関連資料にみる千利休家族の変遷

資料名		千利休妻について	千少庵について	千宗旦について		
					千道安	千少庵
『茶道四祖伝書』		「利休内方ハ宮王太夫ノ後家也」	「少庵ハ宮王ノ子也」、「宗易ノ養子」	「少庵ノ子ナリ」	男子①	「宗易ノ養子」
『千利休由緒書』	内閣文庫本	「利休妻女宗恩」	「二男」、「次男」	「少庵か世倅ニ而利休孫」、「利休孫」、「少庵か子之由」	「嫡子」、「利休嫡子」	「二男」、「次男」
	表千家本	同上	同上	同上。くわえて利休系図に「宗淳—宗旦」とある。	同上 男子①	同上 男子②
随流齋『寛文八年本』		?	「少庵本親ハ三入と申也」	「ちんばか子」「女ならばまこむこニならず物を」	?	?
『随流齋延紙ノ書』		×	「少庵居士、松永タンセウ真父也」	×	×	×
『茶祖的伝』		内室「宮尾道三の女也」、後妻宗恩「北条美濃守氏規の女也。初ハ松永弾正久秀に嫁す。」	「少安ハ仮子也。実ハ久秀の胤也」、「実ハ松永氏の胤にして、母宗恩の仮子也」	「道安の実子ハ元伯宗旦也」、「宗旦ハ少庵の義子、実ハ道安の子也。則利休居士の嫡孫たるにより、家を継しむ。」	「利休居士の嫡子也」	「利休居士の第二子也」
『千家系譜』	本文	×	「宗易実子総領」	「少庵実子総領」	「利休二男」 男子②	男子①
	書き込み	「妻堺宮尾道三ノ女」、「後妻ハ松永弾正ノ妻久秀歿後嫁宗恩ト云」	「母ハ宗恩□子也」	×	「長子母ハ先妻」	「母は宗恩□子也」

男子①、女子①の丸数字は、説明文による出生の順番、あるいは系図に記載されている順番を示す。

筒井紘一は、この特徴を、

稲垣休叟が表千家啐啄齋の門下であったということもあって、茶祖の伝の最大の特徴は表千家所蔵の文書類に原史料をよつているという点である。ことに利休に関する記述は、近年公開された「利休由緒書」〔表千家〕をほとんどそっくり写したものであり、そのほかにも至るところに表千家文書の引用と明らかに思えるものが多い。

と評価している。

⑥ 『千家系譜』

II 2 (1) でもふれたが、紀州徳川家伝来の資料であり、表千家第九代千宗左(了々齋)までの系譜を、文化元年(一八〇四)に筆記したものである。別人の書込みがあり、それは千宗左(了々齋)没(文政八年(一八二五))後のものと考えられる。

(2) 千家関連資料にみる内容の変遷

これらの資料を年代順に並べて整理すると、いくつかの興味深いことがうかがえる。

まず、千少庵の実父について、松永久秀という千家の言い伝えにもかかわらず、宮王三入であることが昭和十九年(一九四四)の資

料紹介で明らかとなり、現在では定説となっていることはI 2 (1)でのべたとおりである。このことを表5でみると、『千利休由緒書』には記載がないものの、『茶道四祖伝書』には「宮王太夫」

と記載されており、千宗佐(随流齋)は、寛文八年(二六六八)の段階では宮王三入とはつきりとのべているのである。宮王太夫は宮王道三のことと考えられるので、やや不正確であるが、それでもこの時期は比較的正しい認識があったと評価できる。しかしながら、その後、千宗佐(随流齋)は、松永久秀であるとはじめて記し、それ以降は、『茶祖的伝』、『千家系譜』にもこの説が受け継がれる。

すなわち、千少庵の実父については、十七世紀中頃には少なくとも宮王家の人物と知られていたにもかかわらず、十七世紀後半のある時期に「松永久秀」という説が生み出され、さらに、十九世紀にはそれが流布し、近代に至ったという経緯がうかがえる。

同様の事例として、まったくありえない話なので、さすがにあまり流布はしていないが、千宗恩が北条美濃守氏規の娘という説は、『茶祖的伝』にはじめて記載されている。少なくとも十七世紀中頃には存在したとは思えない説であり、それ以降、十九世紀初期までに生み出されたものであろう。

千利休の子供の場合にも、それがあてはまる。たとえば、子供の数であるが、『茶道四祖伝書』と『千利休由緒書』とでは一人違いだけだが、その後、『茶祖的伝』、『千家系譜』書込みでは、さらに

清蔵主という子供が増えている。

千宗旦の出自に関する説については、まず、「道安実子説」は、『茶祖的伝』において、「宗旦ハ少庵の義子、実ハ道安の子也。則利休居士の嫡孫たるにより、家を継しむ」と記されている。

一方、千宗旦は千利休の直系であるという「直系実子説」については、すでに『千利休由緒書』においても千少庵を千利休の「二男」「次男」⁽¹⁶⁾とだけ表記しているように、実子であるかのような説明があるが、『千家系譜』の本文では、「宗易実子総領」⁽¹⁷⁾と、千少庵が千利休の実子であると明言しており、「直系実子説」があらわれたものと考えられる。

さて、問題の「利休娘実子説」については、「お亀」が問題となる。いわゆるお亀の文の狂歌は、『茶道四祖伝書』には記されるが、お亀の名前は出てこない。この狂歌と千利休娘お亀が結びつくのは、表千家本『千利休由緒書』からであり、古い形とされる内閣文庫本『千利休由緒書』には、その部分の記載はない。そして、表千家本『千利休由緒書』には、その部分の内容が、『茶祖的伝』『千家系譜』書き込みへと引き継がれる。千少庵の実父に関する言説の変遷ほどは明らかでないにしても、『千利休娘お亀の逸話』が後世に生み出され、展開していったという考えを抱かせるものである。

(3) 千家関連資料の潤色の可能性

千家の人間が千家のことについて記し、それが千家に大切に伝蔵されてきたならば、貴重な資料であることはまちがいないことである。しかし、存在として疑う余地のない千家伝来の資料であったとしても、その内容が潤色を免れているかどうかは別問題である。

『千利休由緒書』は、千家の人間が、体系的に千家について記し、千家に伝蔵されてきたもとも古い資料の一つである。しかし、この内容にも、何人かの研究者が疑問を投げかけている。⁽¹⁸⁾

芳賀幸四郎は、

『千利休由緒書』は、利休の追放について「天正十八年霜月より御勘当、翌十九年正月十三日に堺え追下され、閉門仰せ付けらる」と、明白な誤りを犯しており、その限り史料としての信憑性も疑われる。⁽¹⁹⁾

と指摘し、「この『千利休由緒書』はその成立の経緯上、千家と家康との関係をことさらに強調する傾向が強く」⁽²⁰⁾とその性格を評価している。

また、西山松之助は、『千利休由緒書』を文化的に権威化の象徴として位置づけ、

各流の流儀集団すなわち家元側においても自己の流儀の正統性や権威を、客観的に根拠づける証拠物件を必要としたのである。こうした要求に応えて、この時期になると、大名仕官の茶道諸流において、それぞれ流儀の系統図ならびに、その極秘の技術秘伝書が集大成され、そのような権威化が行われたのであった。したがってそれが個人々々にとつては、各人の茶の履歴書といったものに集約されたのであって、たとえば『南紀徳川史』にみえるごとく、表千家の宗左が紀州徳川の茶道に決定するに当たって、彼が紀州侯に「千家由緒書」を奉ったことなどはその好例といえよう。⁽¹³⁾

とべている。⁽¹⁴⁾ そうした目的で作成されたものであるならば、潤色
がなされていると考えるのが当然であろう。

こうした家系については遡れば遡るほど不たしかとなり、時
としては作爲の加えられることもあって、直ちに信じがたいこ
とは他に例の多いことで、それは千家の場合も同様であるとい
つてよい。⁽¹⁵⁾

と、村井康彦も指摘しているところである。

さらに、神津朝夫は、その経緯を、

おそらく江岑の時代に「家伝」を創作するためいくつかの資料
が集められたのではなからうか。⁽¹⁶⁾

と推測している。千利休没後約六十年の『千利休由緒書』ですら、
このように潤色のおそれがあるならば、より後世の資料である『茶
道要録』、『敵帚記補』、『茶祖的伝』、『千家系譜』などが、より正確
などとはとうてい考えられない。

ただし、このことを非難するのは少々のはずれである。表千家第
五代千宗佐（随流斎）が、千少庵の父親に関してみずから異なる内
容を書き残していることも、何らかの理由があつたものであろう。⁽¹⁷⁾
そこには、千家自身の意図のみならず、幕府や紀州藩などの封建領
主という上からの圧力、さらには弟子たちの下からの要求があつた
という、当時の事情も考慮しなければならないのである。

2 「利休血脈論争」の意義

(一) 「利休血脈論争」の特徴

「利休血脈論争」は、最終的には「利休娘妻子説」が優位に立ち
ながらも、決定的な材料に欠けているため、あいまいなまま終わっ
てしまった形となっている。歴史的には、「千少庵の妻は千利休
の娘お亀といわれている」という以上の表現はできないが、一般に

は、それは確定的な事実として受け止められている。その意味では、「利休娘実子説」陣営は一応の目的を達成したといえるだろう。そこで、この「利休血脈論争」をふり返って、その特徴と意義を考察する。

この論争の特徴として、三つのことを指摘したい。

①千家家元自身の主張はとくに見られないこと。

論争の関係者をみると、裏千家家元の実弟である井口海仙を別にすると、千家家元やその密接な関係者が積極的な発言をしているはいえない。どちらかというと若干の距離がある家元周辺の人々が主導した論争であるといえる。表千家の機関誌である『茶道雑誌』において主に行われた論争であるので、必然的に表千家の家元や宗匠が、それにふれる発言を行っているが、終始とまどいを禁じえないという印象がある。

たとえば「利休娘実子説」の議論が急に盛んになった昭和三十八年（一九六三）は少庵三百五十年忌にあたる。その年に、表千家第十三代千宗左（即中斎）は、「利休娘実子説」の議論を認識しつつも、つぎのように率直な思いをのべている。

少庵が利休の実子でなく、千家二代をついだこと。宗旦の父であることには間違いなく、従来の通説通りでよいものと思いたいです。⁽¹³⁾

そもそも、みずからの家の祖先をめぐる他者が論争していることが、こころよいはずはない。「利休血脈論争」とは、それに先行する千少庵実父が宮王三入であるという説をふくめて、千家にしてみれば、我が家の先祖を他人に書き換えられるようなものである。千家の当主としては、「少庵さんを、そつこのまま伝説のままにしておきたいと、なぜか思われてならない」というのがいつわらざる本音であろう。⁽¹⁴⁾

②千家の意を体し、あるいは体していると意識した議論であること。しかし、当事者たちは、千家のためにと考えて論争していたはずである。

少庵が利休さんの養子であることから、千家の血筋を思う人々が少庵の妻女が誰であったかを、いろいろの材料によつて合理づけようとされている。⁽¹⁵⁾

という千宗左（即中斎）の発言をまつまでもなく、両陣容とも見え隠れする本音は、なんとかして現在の千家が千利休以来の血脈を維持しているとの説明を求めらるることにあつたと考える。そして、その思いが論争を大きくしたといえるのである。たとえば、杉本捷雄は、つぎのようにのべている。

宗且を利休の血脈とするために道庵の子とするような無理な事をせなくても、宗且は利休の娘少庵室お亀の子なることによつて、その血統も明らかなのである。⁽¹⁴⁾

磯野風船子に至つては、千少庵の実父に関する議論で、

わたくしは、宗恩が、松永久秀の妻であつたという説に荷担したのである。なんとすれば、

第一に、宗恩が宮王三郎の妻ということになると、三千家は、能楽の名家でなく、脇筋の子孫、しかもさらにその分家の子孫になつてしまつて、甚だみすばらしくなる。

とのべ、

少庵を松永久秀の子にし、少庵の妻を利休の娘にして、三千家を、利休の立派な後裔だということを主張したい。しかしわたくしの主張は非常に文学的になるのである。⁽¹⁵⁾

などと、論理的でないことを自認しつつ、利休血脈だけでなく、松永久秀の子孫であると主張するのである。挙げ句の果ては、後水尾

天皇の御落胤説まで主張して、千家の権威を高めようとするのである。

さらに、最終局面には、千原弘臣によつて、もう一步踏み込んだ「願望」である「直系実子説」までが再登場してくるのである。

③歴史資料批判に問題があること。

結論ありきのプロバガンダ的論争であり、歴史資料批判もせずに、自己の都合のよい証拠をよせあつめ、強引な議論を展開したものである。初期の論者である井口海仙は、いわば筆は立つが茶人であり、鈴木半茶、杉本捷雄、磯野風船子は、もともと陶磁器の研究者であるので、多少やむをえない面があつたともいえるが、林屋辰三郎、村井康彦などの歴史学者までが、ダブルスタンダード（二重の基準）的な態度で、茶の湯研究の場では安易な主張をしたのは問題である。

もちろん、はつきりとした結論が出ない原因は、歴史資料自体にバイアスがかかっている可能性が大きいのであるが、そうした資料批判的な認識が希薄であつたのか、あるいは、意識的に軽視したのか、それもこの論争の特徴となつてゐる。

（2）「利休血脈論争」の時代背景

どちらの説も根拠は弱いにもかかわらず、錚々たる研究者が関わりながら、やや無理が目立つ議論が行われたのは、当時は、この問

題が非常に重要視される理由があったからと考えられる。

むろん問題は茶の伝統にあり血脈ではないが、血脈の連続・非連続が千家にとつての重大問題であることを否定する理由はない。⁽¹⁴⁾

と歴史学者である村井康彦ですら、千家の血脈の連続性がこの論争のテーマであることを隠そうとしないのは、時代がそれを求めたというべきであろう。そして、うやむやのままにおわつたのは、時代が推移した結果、初期の人々が熱心であった理由が失われ、議論の実益がなくなったことにあるのだろう。この両説の鋭い対立の背景には、おそらく、この時期に家元がおかれていた状況という問題があったと考える。

従来の通説的理解によれば、近世初期あるいはそれ以前から存在していた家元が、「完全相伝」という、相伝権までを弟子に譲渡してしまうシステムから、「不完全相伝」という、すべての相伝権を家元が独占して、教授権だけを弟子に与えるシステムに変化するのには近世中頃のことである。その結果、家元を頂点にして、階層的な中間教授層を組織したピラミッド型の「家元制度」が成立すると説明されている。⁽¹⁵⁾ こうした体制の整備を行った千家流の茶の湯は、江戸、京、大坂、名古屋をはじめ、各地の町人層に歓迎され、受け入

れられたのである。⁽¹⁶⁾ この時期に形成された「家元制度」が紆余曲折をへて現在に至っている。

しかし、その発展の歴史は、明治維新で大きく挫折することとなる。茶の湯自体が衰退期を迎え、家元も雌伏の時期を余儀なくされるのである。その一方で、明治二十年代から財閥・貴紳らの近代数寄者が活躍する、茶道具の収集や鑑賞を主眼とする茶の湯の興隆がみられた。

その後、徐々に家元を中心とする茶の湯も復興することとなる。これを象徴的に表現するならば「女性の進出と家元の復権」ということができる。⁽¹⁶⁾ これは茶の湯の受容層が男性中心から女性中心に変化すること、そして、茶の湯における指導者として家元が台頭すること、この二重の意味で茶の湯の担い手の交代を意味している。そして、昭和戦前期には、近代数寄者よりも家元の方が茶の湯の世界では実力をもつに至るのである。この時期の状況について、熊倉功夫は、つぎのようにのべている。

戦争による崩壊をまたずとも、茶道界は財界の数寄者の手を離れていた。もはや茶道界にとつての支持者は、財界ではなく大衆であり、大衆によって保護される茶の宗匠ではなく、ここには大衆を指導する宗匠の姿があった。⁽¹⁷⁾

そして、第二次世界大戦後の昭和二十年代には、家元を中心とする流儀の茶の湯は、今までにない、特殊な状況におかれることとなる。その状況とは、二つの相反する要素から成り立っていた。一つは、戦前の旧体制が崩壊することにより、昭和戦前期から進行していた状況が一気に表面化したのである。近世の封建領主に由来する大名華族も、近代に経済力を身につけた財閥の近代数寄者も社会的経済的地位を喪失した。家元は、みずからの力で茶の湯の世界を先導していかねばならないし、それが可能な唯一の存在となったのである。しかしながら、もう一つの状況として、家元も、旧体制批判、封建制批判の一環として、きびしい批判を受けたのである。⁽¹⁸⁾

このような状況下において、家元を中心とする流儀の茶の湯は、まず、封建制批判に対抗しつつ、新たな社会状況を奇貨として、自己を正統性の根拠として、今までにない広範な大衆層に立脚した現代家元システムを作り上げるのである。

ここに、家元にとって、もう一つの幸運があった。それは昭和三十、四十年代にかけての高度経済成長⁽¹⁹⁾である。熊倉功夫は、千利休三百五十年遠忌の昭和十五年（一九四〇）以降を、「家元の時代」と認識しつつ、

私は従来、茶の湯の近代を、衰退、数寄者、家元の三つの時代に区分して論じてきた。しかし、昭和十五年より今日まで、

すでに五十年を経過して、その内容も大きく変化してきているように感じるようになった。（略）昭和三十年代より四十年代、すなわち日本の高度経済成長期に茶の湯のあり方が変化したと考えてよいかと思えた。⁽²⁰⁾

とのべ、茶の湯の歴史において高度経済成長期の重要性を指摘している。⁽²¹⁾

（3）現代家元システムへの道程

このような時代背景を勘案すると、本稿で論じた「利休血脈論争」は、年代的には厳しい家元制度批判にさらされた昭和二十年代の状況に対抗して、家元の文化的地位を確立しようとする家元周辺の動きとして位置付けられるのではないかと考える。千利休の血脈上の子孫であるというのは、自己しかよるべきところがない家元自身にとって、もつとも有効な正統性の根拠であることはいまでもない。

戦前からの茶の湯愛好者にとって、千家の家元の権威は当然のことであつたが、高度経済成長期にあらたに茶の湯の世界に参入した多数の門弟に対し、あらためて家元とはいかなるものかを理解させる必要があつた。そのもつともわかりやすい説明が「利休血脈」であつたわけである。

この「利休血脈論争」に対して、表千家家元はとまどいを感じていたと指摘した。家元にとって、千家が茶の湯の家元であることは当然のことである。何代にもわたって当たり前であることを、なぜ論争までしてあらためて確認しなければならないのか、そういう思いがあったのではないかと考える。

この状況における対応を適切に認識していたのは、裏千家の方であろう。裏千家第十五代千宗室（鵬雲斎）は、茶の湯の家に生まれたことを、

私はいつもみんなにいうのです。（略）私は緑の血を持って
いるのだ、と。⁽¹³⁾

と表現する。その真意は、「母親の胎内からお茶を飲んでこの世に
出てきた」⁽¹⁴⁾などという皮相的なものではない。この発言は、千利休
以来の血脈に対する誇りに裏打ちされたものであり、これを聞く人
はだれでも「利休血脈」のことと、即座に理解するだろう。

昭和三十年（一九五五）一月、当時は千宗興若宗匠であった千宗
室（鵬雲斎）の結婚を伝える『淡交』昭和三十年三月号⁽¹⁵⁾は、巻頭に
「祖堂婚儀の意義」をかかげ、つぎのとおり血脈相承の意義を説明
している。

一子相伝と言われ、ことの奥儀に関することは、全て第三者
の介入を許さず、血から血へと、その純粹さを維持せしめて行
こうとします。これは秘事なるが故に一子に相伝せしめるので
はなく、むしろ真実の純粹さを保持せんが為に、むしろ第三者
の介入を許さず、一子に相伝することによつて、そこに血統的
な裏づけをなさしめたものと考へられます。

仏教各派の中にもこの血脈の相承を本来とする宗派の多く見
ますのも、又芸道に於てこれらの形式を見ますのも、この血統
的なものによつて、かへつて祖の精神の純粹な維持発展を祈念
したものに外ありません。

血すじが貴いと言うことは、その血すじなるが故に、又その
血すじなればこそ、純粹な精神の存続を乞い願う、人間一般の
心情の発露に他ありません。

このようにして、裏千家は、家元の正統性としての利休血脈のイ
メージを伝え広めることに努力してきたのである。これは家元側か
らだけの一方的な情報発信にとらえるべきではない。数多くの門弟
が家元に対して求めていたイメージを明確化したものとも考えられ
る。昭和三十年（一九五五）という早い時期で、このような確な
方向性を認識していたことが、裏千家のその後の発展に大きく寄与
したことは明らかであろう。

「利休血脈論争」は、一見、家元自身の権威をそこなう行為であるようにもみえるが、第二次世界大戦後という時代背景にあつて、家元の正統性に関する議論が過熱した現象であつた。この論争がきびしい対立状況を示した時期の中心をなす杉本捷雄の論文発表が昭和三十四年（一九五九）であり、その承認としての村井康彦『千利休―その生涯と茶湯の意味』の刊行が昭和四十六年（一九七二）であることを考えると、高度経済成長期における社会の変容を反映しているものと推測されてもよいだろう。家元の認識がどのようなものであれ、この一連のできごとは、高度経済成長期に出現する大衆層を基盤とする巨大な現代家元システムへ至るためには、どうしても通らざるをえない道程であつたのである。

注

* 引用文中の漢字は原則として通用のものにあらためた。ルビ・送り仮名など省略したものもある。

- (1) 本稿では、組織体としての家元や制度としての家元の意味で「家元システム」という表現を用いる。不完全相伝制に移行した後、家元のことを「家元制度」と限定的に用いる考え方があるので、一般的な「家元制度」という表現を避けることとした。
- (2) 千利休娘とされる「お亀」の名は、「亀」、「亀女」、「おかめ」などとも表記されるが、本稿では、引用文中では出典に従うこととし、それ以外の場合は、お亀で統一する。

- (3) 表千家は、特別展「三百五十年遠忌記念 元伯宗旦展―残された手紙にみる生涯と茶の湯―」表千家北山会館、平成十九年（二〇〇七）十月六日～十二月二十日開催。裏千家は、宗旦三百五十年忌記念 秋季特別展「千宗旦」茶道資料館、平成十九年（二〇〇七）十月七日～十二月十九日開催。

- (4) 特別展「三百五十年遠忌記念 元伯宗旦展―残された手紙にみる生涯と茶の湯―」図録、不審庵文庫編集、表千家北山会館発行、平成十九年（二〇〇七）、六一頁。

- (5) 宗旦三百五十年忌記念 秋季特別展「千宗旦」図録、茶道資料館編集発行、平成十九年（二〇〇七）、一三四頁。

- (6) 前掲、特別展「三百五十年遠忌記念 元伯宗旦展―残された手紙にみる生涯と茶の湯―」図録、六二頁。

- (7) 村井康彦『千利休追跡』角川書店、平成二年（一九九〇）、四一頁。

- (8) 大河内風船子『長次郎 楽代々』日本陶磁大系第十七巻、平凡社、平成二年（一九九〇）、八八頁。

- (9) 米原正義『天下一名人 千利休』淡交社、平成五年（一九九三）、三〇四頁。

- (10) 田中秀隆は、「昭和初年の茶道の特質は、アカデミズムの世界と茶道との交流に求められている」（『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版、平成十九年（二〇〇七）、一〇頁）と指摘する。

- (11) 大岡山書店発行。まえがきにあたる例言で、高橋龍雄は「日本文化史の立場から見た茶道を略述する」とのべている。熊倉功夫はこの書を「明治以来はじめて完備した概説書」（『近代茶道史の研

究』日本放送出版協会、昭和五十五年（一九八〇）、二三頁）と評価している。なお、同じ年、岡倉天心の英文著作 *The Book of Tea* の翻訳『茶の本』が岩波文庫におさめられ、広く知識人にその内容が知られることとなる。

(12) 創元社発行。内容は玉石混淆の感もあるが、この時期の茶の湯研究の高まりを示すものである。

(13) 昭和十九年（一九四四）二月以降『茶道雑誌』と改題し、今日に至っている。

(14) 檉廼舎「巻頭言『わび』の弁」「わび」創刊号、昭和十二年（一九三七）、わび社、一頁。

(15) 『わび』創刊号の目次によると、巻頭言のあと、「佗数寄に就て」（渡邊虹衣）、「祇園の忠盛燈籠」（川勝政太郎）、「普齋のでかな」（西堀一三）と続くが、表千家に直接関係するものは、巻末の方に「茶道講座（表千家流）」（吉田堯文）、「発刊を祝す」（表千家千覚二郎）の二つだけである。なお、「千覚二郎」とは襲名前の表千家第十三代千宗左（即中齋）である。

(16) 片山九郎右衛門「少庵の実父」『茶道月報』昭和十九年（一九四四）六月号、茶道月報社、七〜九頁。

『四座役者目録』の記事につき、つぎのように紹介されている。

三郎―これが問題の人物である。

宮王三郎鑑氏

道三ノ弟ナリ。（略）三郎、一調鼓（略）良く打ツ。後、

手叶ハズシテ、三入ト云ヒテ三好殿「近作」（不詳）伽ヲ

スル。茶湯者ノ少庵ハ三入ノ子ナリ。三入ノ後家ノ千利休

へ行く。今ノ宗旦ハ本ハ三郎孫ナリ。竹田トモ名字ヲ云フ。
（竹田は金春の本姓）

これによれば、宮王大夫宗竹の三男、三郎鑑氏、後に三入といふ小鼓打の女房が、三入死去の後、その子を連れ子して、千利休のもとへ嫁したことになる。（九頁）

(17) 近世初期の大名木下延俊の日記に千少庵が登場するが、能楽の小鼓方の観世道叱と一緒にことがたびたびあることも、宮王三入の子であると考えると容易に理解できる（二木謙一・莊美知子校訂『木下延俊慶長日記』新人物往来社、平成二年（一九九〇）、一〇二、一〇三、一一九、一三九頁）。ちなみに『四座役者目録』は、観世道叱の子観世元信が編纂したものである。

なお、二木謙一は、六月十三日の条に「少庵参られ候て、夜ノ初夜時分まで仕られ候」とあることから、千少庵が「茶湯を仕つたと解せられるので、やはり茶湯を行うことが多かったものと思われる」と推測している（二木謙一『慶長大名物語―日出藩主木下延俊の一年―』角川書店、平成二年（一九九〇）、一四一頁）。しかし、前掲『木下延俊慶長日記』の翻刻（二二六頁）でも、原文（二七五頁）をみても、「仕られ」ではなく「咄され」である。千少庵が千家第二代であるから、その先入観で誤読したものであろう。木下延俊の日記には二十回登場し、ひじょうに親しい関係の「少庵」であるが、茶壺の記事（四月十四日の条）があるほかは、茶会に招いた、または招かれたという記事はまったく見当たらず、かえって能楽との深い関係が感じられることを指摘しておく。

(18) 明治四十一年（一九〇八）に『今日庵月報』として創刊され、

大正十一年(一九二二)に『茶道月報』と改称する。

- (19) 井口海仙「道安と少庵(下)」『茶道月報』昭和二十九年(一九五四)二月号、一一頁。

(20) たとえば、井口海仙はこの時期に以下の発言をしている。「私は、宗旦が、道安の実子であるといいたいのである。」(「千宗旦略伝」『茶道月報』昭和三十一年(一九五六)十二月号、四頁)、「私は、利休の実子道安の子であると信じている。」(「元伯宗旦伝」『淡交増刊号—宗旦とその時代—』昭和三十三年(一九五七)十月、四〇頁)

(21) 千道安の記述中に「道安の実子ハ元伯宗旦也」とあり、さらに千少庵の記述中に、「宗旦ハ少庵の義子、実ハ道安の子也。則利休居士の嫡孫たるにより、家を継しむ」とある(「茶祖的伝」木芽文庫編『茶湯』六号、昭和四十八年(一九七三)、思文閣出版、五〇頁、五二頁。詳細は本文後述)。

(22) 「宗旦は少庵の子ではなく、道安の子で、少庵は之を義子としたとの異説もある。」吉田堯文「千家の伝統」『茶道全集』第九巻、創元社、昭和十年(一九三五)、一三八頁。

(23) 「宗旦は、実は少庵の子ではなく、道安の子であつたとされる事であります。」西堀一三『千利休』河原書店、昭和十五年(一九四〇)、一一四頁。

(24) 鈴木半茶「利休と宗音(三)」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五七)十月号、四四頁。

(25) 吉田堯文「元伯宗旦の一生」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五七)十一月号、五〇頁。

(26) 鈴木半茶「少庵伝小藁(その五)」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五八)九月号、五四〜五五頁。

(27) 鈴木半茶「少庵伝小藁(その六)」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五八)十月号、一一頁。

(28) 鈴木半茶は、『敝帚記補』を松尾流第六代の松尾宗二(宝暦二年(一七五二)没)の茶書であると説明している(「少庵伝小藁(その四)」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五八)八月号、五〇頁)。

『角川茶道大事典』普及版(角川書店、平成十四年(二〇〇二)、一二三頁)には、「敝帚記」の項目で記載があり、「松尾流茶法の伝書。松尾宗二著。写本六巻、付録一卷七冊。享保七年(一七二二)成立。茶会の式法、茶事の形式、棚の扱い、各種点前作法を図解している。松尾流茶法の根本資料といえる。今日庵文庫蔵」と筒井紘一は解説している。しかし、『敝帚記補』には、寛延三年(一七五〇)とされる「庚午冬」の記事があり、『敝帚記補』の成立は、松尾宗二(一六七七〜一七五二)の最晩年かと考えられる。

(29) 鈴木半茶は、このころ他に二つの『敝帚記補』の記事を紹介している。

一つは、表1に示した千少庵が木下長嘯子の子であるという説であり、鈴木半茶自身「事実少庵は天文十五年出生であるので長嘯より廿五年も前に生れているからである。考えるにこれは少庵の非凡の人為から、それにふさわしい偉い父親を配さないでは都合が悪いという、さかしらな作意をやった時代もあつたのであり、その証左がこの文献なのである」と、全面的に否定している(鈴木半茶「少庵伝小藁(その四)」『茶道雑誌』昭和三十三年(一九五八)八月号、

五〇頁。

もう一つは、千宗恩の出自に関して、「モト乳守ノ遊女ナリシヲ道三妻トス。道三没利休ニ嫁ストゾ（敝帚記補九卷、雑談一）」という説であり、鈴木半茶は、「これはまた珍説である」とのべている（鈴木半茶、前掲「少庵伝小藁（その五）」五三頁）。

ちなみに、千宗恩の出自は、昭和初期には関心が持たれた問題である。その諸説をあげると以下のとおりである。①北条美濃守氏規（二五四五〜一六〇〇）の娘・出典『茶祖的伝』、②宮尾道三の娘・出典『堺鑑』（続々群書類従）第八、国書刊行会、明治三十九年（一九〇六）、六五六頁）。なお、『茶祖的伝』では先妻のこととする。

③三好長慶（一五二二〜一五六四）の娘・出典不詳。吉田堯文『茶塵抄』河原書店、昭和十年（一九三五）、三一頁（三好長慶の女とも称されるが、実は堺の宮尾道三の女）。なお、これを先妻のこととする説は、井口海仙「道安と少庵」『茶道全集』第九卷、創元社、昭和十年（一九三五）、四九頁。竹内尉『千利休』創元社、昭和十四年（一九三九）、一六一頁。④平野道桂の姉・松山米太郎『註解茶道四祖伝書』秋豊園、昭和八年（一九三三）、四二頁。

(30) 『茶道雑誌』昭和三十四年（一九五九）十一月号、六〜一二頁。引用は七、八、一一、一二頁。

(31) 『茶道雑誌』昭和三十五年（一九六〇）十月号、八〜一三頁。

(32) 『茶道雑誌』昭和三十六年（一九六一）八月号、五四〜五九頁。

(33) 『茶道雑誌』昭和三十八年（一九六三）十一月号、八七〜九四頁。

(34) 杉本捷雄の仮説発表にさきだち、磯野風船子は、「利休像の筆

者は等伯」（『茶道雑誌』昭和三十四年（一九五九）八月号）において、当該表千家蔵伝長谷川等伯筆利休坐像について、つぎのとおりをべている。

何故にわたくしが、等伯筆に拘泥するかといえば、筆者不明の画像より、等伯と断定されることによって、依頼者の宗慶の地位が高まるからである。（二五五頁）

宗慶は、長谷川等伯に肖像画を描いて貰い、春屋に贄をして貰って、利休の回向をしたのであるから、単なる陶器の職人とは考えられない。当時としては、相当な人物だったのである。（二一九頁）

(35) 磯野風船子（明治三十五年（一九〇二）〜平成二年（一九九〇））は、理化学研究所所長、理研産業団（理研コンツェルン）の指導者である子爵大河内正敏の長男として生まれる。本名信威。昭和五年廃嫡。のちに大河内に復姓する。

(36) 『陶説』昭和三十五年（一九六〇）六月号、日本陶磁協会、五三〜五七頁。引用は五三、五七頁。

(37) 『茶道雑誌』昭和三十七年（一九六二）三月号、一五〜二〇頁。

(38) 『茶道雑誌』昭和三十九年（一九六四）一月号、三六〜四三頁。『茶道雑誌』昭和三十九年（一九六四）二月号、五一〜五五頁。

(39) たとえば、「井口氏の説によると、（略）これは何によられたのであるうか。御教示を賜りたい。（略）この書いてある文献を教えて頂きたい。（略）これらのことが明確にされ、記事の確実性が実証されない限りは、総てはただ、蜃気楼的憶測になつてしまふ」（磯野風船子「少庵の父を文学的に考察する（二）」『茶道雑誌』昭

和三十九年（一九六四）二月号、五五頁）とたたみかけるように批判している。

(40) 林屋辰三郎「京の茶家―その成立と背景―」井口海仙ほか編『京の茶家』墨水書房、昭和四十四年（一九六九）、三二頁。

(41) 井口海仙「道安と少庵（下）」『茶道月報』昭和二十九年（一九五四）二月号、一一頁。

(42) 村井康彦「千利休―その生涯と茶湯の意味―」日本放送出版協会、昭和四十六年（一九七二）、一一八、一一九～一二〇頁。

(43) 千宗左（即中斎）編『元伯宗旦文書』茶と美舎、昭和四十六年（一九七二）。なお、千宗左（而妙斎）監修、千宗員編『新編元伯宗旦文書』（表千家不審菴文庫）が平成十九年（二〇〇七）に刊行されている。

(44) 元伯宗旦文書の内容に対して、本質的な議論はいまだ行われていない。子供の仕官に奔走したにもかかわらず、なぜ千宗旦は自身自身が仕官しなかったのか。子供の仕官に千宗旦はなぜこれほど苦労したのか、後世このような事実がまったく伝えられなかったのはなぜかなどの問題は、まったくといってよいほど考察の対象となっていない。

(45) 数江教一「宗旦の父親」前掲『元伯宗旦文書』解説九三頁。なお、明らかな誤植は訂正した。

(46) 井口海仙「道安と宗旦」『茶道雑誌』昭和四十六年（一九七二）九月号、二四頁。

(47) 中村昌生「宗旦の茶室補遺」『茶道雑誌』昭和四十六年（一九七二）九月号、三三頁。

(48) 林屋辰三郎「茶書の歴史」林屋辰三郎ほか編注『日本の茶書1』平凡社、昭和四十六年（一九七二）、四九～五〇頁。

(49) 磯野風船子「江岑について」『茶道雑誌』昭和四十六年（一九七二）十二月号、二四～二五頁。

(50) 熊倉功夫によれば、「ほとんど史料らしきものがなく、ただ寛文十二年（一六七二）八月二十四日に没したことは明らかであるが、享年は不明となっている。（略）また東福門院の侍女という伝承もあるが、史料的に証明するものはない。」（熊倉功夫「真巖宗見文書について」前掲『新編元伯宗旦文書』五一～五二頁）

(51) 磯野風船子「茶の湯同好会七周年記念茶会―三千家誕生の由来―」『茶道雑誌』昭和五十二年（一九七七）二月号、八九頁。磯野風船子「三千家成立の時期」『茶道雑誌』昭和五十三年（一九七八）二月号、七三頁。磯野風船子「少庵、宗拙、一翁」『茶道雑誌』昭和五十三年（一九七八）四月号、九二頁。

(52) 磯野風船子「三千家誕生の由来補訂」『茶道雑誌』昭和五十二年（一九七七）四月号、三七頁。

(53) 事実、磯野風船子はそれまでの研究成果を否定して、千少庵が松永久秀の子であることを強硬に主張しつづけ、たとえば、つぎのとおり独自の見解をのべている。

少庵は、利休の娘お亀と結婚した天正五年まで、松永久秀の子として、武士道と武士の茶の湯の指導を受けた人である。天正十五年ごろまでの十年間で、利休の侘び茶が理解出来る筈がない。利休の町人思想は、武士思想と完全に相反するものである。少庵を利休の後継者にしたのは、徳川家康と蒲生氏郷であ

つて、利休ではない、家康と氏郷が少庵を推薦したのは、松永久秀の子であつて、武士の支配と武士の茶の湯に協力してくれる可能性があつたからである。(大河内風船子「再三待庵について」(一)『茶道雑誌』昭和六十一年(一九八六)十月号、七五頁)

これでは、千利休以来のわび茶を継承してきたという千家の自己認識と矛盾する。

(54) 資料の発表は、桑田忠親『千利休』青磁社、昭和十七年(一九四二)、一六五頁。その経緯は、桑田忠親『千利休研究』東京堂出版、昭和五十一年(一九七六)、二六七頁に詳しい。

(55) 村井康彦「少庵と道安(その一)」『茶道雑誌』昭和五十二年(一九七七)十月号、一九頁。

(56) 村井康彦、同右論文、一八頁。

(57) 村井康彦、「少庵と道安(その三)」『茶道雑誌』昭和五十二年(一九七七)十二月号、二二頁。

(58) 「『一黙稿』には春屋和尚が宗旦の詩に和した「和旦少年試春人韵末」が文禄三年四月とあり、この時期までは大徳寺にあつたと考えるのが一般的な理解となっている。」村井康彦「少庵と道安(その四)」『茶道雑誌』昭和五十三年(一九七八)一月号、九四頁。

(59) 村井康彦、同右論文、九五頁。なお、千宗守の生年の根拠は「延宝三年十二月十九日没、行年八十三歳から逆算」としている。

(60) 村井康彦、同右論文、九五頁。

(61) 筒井紘一「宗拙作『打くもり』茶杓と三宅亡羊画像―千家再興

遺聞―』『淡交』昭和五十一年(一九七六)十二月号、一七三頁。

(62) 「慧光寺の過去帳によると、一翁の生年はこれまでの説を十一年繰り上げて慶長十年(一六〇五)となり、宗旦が二十八歳の時の子となります。」大江崇之「智照山墓所石碑配当の図と智照山慧光寺過去帳」『起風』平成十五年(二〇〇三)秋季号、官休庵、八〇頁。

(63) 小松茂美『利休の死』中央公論社、昭和六十三年(一九八八)、二七九頁。

(64) ただし、小松茂美は、お亀について、「『お亀といふは、居士(利休)が娘にして、少庵が妹なり』という。となると、この記載を信ずるかぎりにおいて、その母は宗恩。おそらくは、宗恩が利休の家に再嫁する以前に、利休との間に出産していたのではなからうか」(小松茂美、同右書、二七七頁)とのべている。となると、お亀と千少庵とは異父同母となるのであろうか。

(65) 前掲、米原正義『天下一名人 千利休』巻末資料。

(66) 矢部誠一郎「利休の家族」米原正義編『千利休のすべて』新人物往来社、平成七年(一九九五)、二七頁。

(67) 清瀬ふさ子「千少庵筆『云置き』のこと」『茶道雑誌』昭和五十三年(一九七八)二月号、六六頁。

(68) 清瀬ふさ子、同右論文、六七頁。

(69) 芳賀幸四郎『わび茶の研究』淡交社、昭和五十三年(一九七八)、一〇二―一〇三頁。

(70) 「そもそも少庵に嫁したという利休の娘に関する史料は存在しない。」中村修也「千少庵論」熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』、

思文閣出版、平成十五年（二〇〇三）、六三頁。

- (71) 「宗旦は、少庵と妻のおちようとの間に生まれた。少庵は宗恩と能役者宮主三郎三入との間に生まれ、利休の養子となった人物であるが、おちようについては全く不明である。(略) これまでおちようという人は利休の娘の亀であるとされ、少庵は養子であったが利休の娘と結婚したという説もあるが、亀は万代屋宗安の妻であることが『利休由緒書』に明記されており、その説の可能性が低いことがわかった。」熊倉功夫「千宗旦の生涯 第一回 利休と宗旦」『茶湯』三七五号、茶の湯同好会、平成十七年（二〇〇五）、一頁。
- (72) 千原弘臣『利休の年譜』淡交社、昭和五十七年（一九八二）、三三六頁。

- (73) 千原弘臣は、「何故か江岑と宗偏のこの記述は見逃され、お亀は少庵の妻と誤られている。お亀は宗安没後、万代屋の後家として千家一族に知られていた」（千原弘臣『元伯宗旦』淡交社、平成元年（一九八九）、二四頁）とものべている。

- (74) 千原弘臣、前掲『利休の年譜』三六六、三四四、三三三頁、三九〇頁。

- (75) 千原弘臣は、「宗旦が少庵を利休のせがれと書いた注目すべき書状」をもって「宗旦の父が少庵であることを示すのみならず、利休・少庵・宗旦・江岑の茶の系譜をも表わす」と主張するが、飛躍が過ぎるといわざるをえない（引用は、千原弘臣、前掲『元伯宗旦』一三三頁）。

- (76) 表千家本の翻刻は、以下に掲載されている。数江教一「千利休由緒書について」千宗左（即中齋）編『表千家』角川書店、昭和四

十年（一九六五）、六三〜七〇頁。『利休大事典』淡交社、平成元年（一九八九）、六五二〜六五九頁。なお、杉本捷雄は、高木文編著『茶聖利休居士記録』昭和十五年（一九四〇）所収の養翠亭藏本と表千家本とを校合翻刻している（杉本捷雄『千利休とその周辺』淡交社、昭和四十五年（一九七〇）三二一〜三三二頁）。

- (77) 内閣文庫本の翻刻は、熊倉功夫・氏家幹人「千利休伝記」『茶道聚錦』第三卷、小学館、昭和五十八年（一九八三）、二九八〜三〇四頁。

- (78) 数江教一、前掲「千利休由緒書について」六九頁。なお、当該部分は内閣文庫本にはない（熊倉功夫・氏家幹人、前掲「千利休伝記」三〇三〜三〇四頁）。

- (79) 前掲『利休大事典』六六二頁。

- (80) 注28においてのべたとおり。詳細は定かではない。杉本捷雄の引用文の内容から判断すれば、『敬帚記補』は『敬帚記』成立後に著され、性格も異なる書物のように思える。

- (81) 杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』一三六頁。

- (82) 鈴木半茶、前掲「少庵伝小藁（その五）」五五頁。

- (83) 杉本捷雄、前掲「慶長八年春屋宗園賛利休坐像について」八頁。

- (84) 文化元年（一八〇四）成立。さらにその後の書き込みがある。高木文編著『茶聖利休居士記録』昭和十五年（一九四〇）に写真版が収録されている。それを、杉本捷雄が前掲『千利休とその周辺』三〇三〜三二二頁に翻刻、掲載している。

- (85) 鈴木半茶、前掲「少庵伝小藁（その五）」五五頁。

- (86) 杉本捷雄、前掲「慶長八年春屋宗園賛利休坐像について」八

頁。

- (87) 杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』一三六頁。
- (88) 村井康彦、前掲「少庵と道安」(その四) 九七頁。
- (89) 引用は、『言海』昭和六年(一九三二)、六二八版を復刻した『言海』筑摩書房、平成十六年(二〇〇四)、二二九頁による。
- (90) 土井忠生ほか編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店、昭和五十五年(一九八〇)、三三三頁。
- (91) 中村修也、前掲「千少庵論」六四頁。
- (92) 吉田堯文「おちやう宛の文」『わび』昭和十五年(一九四〇)七月号、口絵および一三〜一四頁。引用は、一三、一四頁。
- (93) 鈴木半茶、前掲「少庵伝小藁(その五)」五六頁。
- (94) 杉本捷雄「文禄、慶長利休像余談」『茶道雑誌』昭和三十六年(一九六一)八月号、五六頁。
- (95) 杉本捷雄「少庵内室のことども―亀女礼讃―」『茶道雑誌』昭和三十八年(一九六三)十一月号、八九〜九〇頁。なお、つぎの二つの引用は、九〇頁。
- (96) 杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』一三八頁。つぎの引用は、一三八〜一三九頁。
- (97) 「おちやう」を「お蝶」とのべた杉本捷雄が「お長」に見解を変更したことについて、角田文衛『日本の女性名』国書刊行会、平成十八年(二〇〇六)によると、桃山時代から江戸時代前期に「(お)ちやう」(二四〇、二六二、二七九、二八三、二九〇頁)あるいは「長」(二八一、二九〇頁)という名前の実例は、いくつかみられるが、「てふ」あるいは「蝶」という名前の実例は見当たらない。

ない。結局、杉本捷雄が「女性の俗字として考えられるもつとも穏当な字は、やはり『お蝶』を除いては考えられまい」と断定的のべたことは、何ら根拠もない誤りというべきである。

(98) 『幼名』であるという説明について、村井康彦も否定はしないが、これに対して、近世史研究からはつぎのような指摘がある。

男性は成人すると幼名から成人名に改め、当主になると家名を襲名することが多いのに対し、女性は、嫁ぎ先で同名の女性がいる場合などを除いて、出生時につけられた名前を大人になつてからも変えないのが通例である。(大藤修「小経営・家・共同体」『日本史講座第六巻 近世社会論』東京大学出版会、平成十七年(二〇〇五)、二〇頁)

身分制が厳格となった江戸時代と、安土桃山時代とは、違いはあるかもしれないが、一つの判断材料にはなるだろう。

(99) 昭和四十五年(一九七〇)の杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』には、「少庵内室のことども―亀女礼讃―」として、『茶道雑誌』昭和三十八年(一九六三)十一月号に発表した論文と同じ表題の論文が収録されている(二三五〜一四五頁)。内容は、おおむね表現の修正程度であるが、「おちやう」と「お亀」との名前の違いに関する部分(二三八〜一三九頁)については、全面的に書きあらためられている。

(100) 小松茂美『利休の手紙』小学館、昭和六十年(一九八五)、三四五頁。

(101) 村井康彦、前掲「少庵と道安」(その四) 九七頁。

(102) この問題に一応の検討をくわえたのは、山田無庵『キリシタン

千利休 賜死事件の謎を解く』(河出書房新社、平成七年(一九九五))である。長くなるが当該部分を引用する。

「お亀」と「おちよう」の二つの呼び名についてすこし一般的なことを述べておこう。角田文衛『日本の女性名(中)』によれば、室町時代の公家・武士の社会では男子は五、六歳ころから二十歳くらいに間に元服の式を行い、幼名ないし通称を改めて諱(名乗)をつけるのが慣例であったという。女性については元服に対する裳着というものがあつたが、必ずしも諱は与えられなかったという。しかし、裳着の前後、または結婚の前あるいは宮仕えの際に、諱、すなわち実名が定められた、という(七七頁)。桃山時代にも武將の娘の名前が変えられることは角田『日本の女性名』に実例があげられており普通のことであつたと思われる。利休の場合、武士ではないので、女子の場合に幼児名と実名をもつことが一般的なものかどうか判断できないが、そのようなことがあつたとしてもそれほど不自然ではないように思う。(七〇～七一頁)

この引用はいかにも不適切である。引用文の最後の「すなわち実名が定められた」につづく角田文衛のつぎの文章を紹介すれば、その結論は逆であることが明らかとなる。

ところが、南北朝時代から乱世につづき、公家社会が衰微すると、女子の裳着は行われなくなり、実名も与えられなくなつた。したがつて叙位されたり、女房として参仕する一握りの婦人を除けば、女性は童名や愛称をそのまま持ちつづけ、結婚してもそれを変更しないようになった。(角田文衛、前掲書、二

〇五頁)

そもそも、この記述は、室町時代の「貴族女性の通常名」の一部であり、ここでいう実名とは、「伝統的かつ古典的な×子型の女性名」(角田文衛、前掲書、二〇五頁)のことである。「お亀」とか「おちやう」とかの類ではない。山田無庵は、「桃山時代にも武將の娘の名前が変えられることは角田『日本の女性名』に実例があげられており普通のことであつたと思われる」とのべるが、叙位を受けるなどのきわめて特殊な事例である(角田文衛、前掲書、二二七頁)。さらに、山田無庵は、「利休の場合、(略)判断できない」とのべつとも、何ら根拠もなく「それほど不自然ではない」と結論付けている。

もう一点指摘しておく。山田無庵は、前述の引用文のあとにつづきのようにのべている。

角田『日本の女性名』の記述から判断すると、「おかめゆよ」とこの「おかめ」が醜女を意味する普通名詞として使用されるのは江戸時代になつてからのようであるが、あるいは、利休の時代にもそのような意味合いがあり、そんなに美人ではなかつた「おちよう」をお亀と利休が愛称で呼んでいたのかもしれない。

しかし、この引用も曲解に満ちた無責任なものである。角田文衛ののべているのは、つぎのような内容である。

「おかめ」という名の女性の存在は、それがまだ醜女を意味する普通名詞とはなつていなかったことを指証している。かめ(龜)という名は、この時代には最もありふれた女性名であつ

- て、家康の側室の志水おかめ、家康の娘の龜姫とか(略)などは、容易に念頭にうかぶ名である。(角田文衛、前掲書、二四五～二四六頁)
- (103) 小松重男『旗本の経済学』(新潮社、平成三年(一九九二))に女子改名の事例が紹介されている。主人公(川村修富)の妻も改名している(二六六頁)が、長女は二回改名している(九九頁、一〇五頁)。
- (104) 松山吟松庵校註・熊倉功夫補訂『茶道四祖伝書』思文閣出版、昭和四十九年(一九七四)、三四三頁。
- (105) 松山吟松庵・熊倉功夫、前掲『茶道四祖伝書』六〇頁。
- (106) 松山吟松庵・熊倉功夫、前掲『茶道四祖伝書』二二頁。
- (107) 中村修也、前掲『千少庵論』六二～六三頁。
- (108) 鈴木半茶、前掲『少庵伝小藁(その五)』五六頁。
- (109) 杉本捷雄、前掲『少庵内室のことども―亀女礼讃―』九三頁。
- (110) 村井康彦、前掲『少庵と道安(その四)』九五頁。
- (111) 山田無庵、前掲書第三章参照。
- (112) 松山吟松庵・熊倉功夫、前掲『茶道四祖伝書』。
- (113) 数江教一、前掲『千利休由緒書』六四頁参照。杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』三二二～三三二頁。それに対して、否定的な考え方は、前掲『利休大事典』六五九頁。
- (114) 熊倉功夫・氏家幹人、前掲『千利休伝記』二九八～三〇四頁。
- (115) 数江教一、前掲『千利休由緒書について』六三～七〇頁。杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』三二一～三三二頁。前掲『利休大事典』六五二～六五九頁。
- (116) 熊倉功夫・氏家幹人、前掲『千利休伝記』二九八頁。
- (117) 当該資料中に「逢原(源)齋口上三而」と「逢原齋口上ニテ」の二カ所がある。本文前述は前者の方であるが、ここでは後者の方をさす。
- (118) 『茶道雑誌』に四回連載された千芳紀「江岑宗左と随流斎―新史料の紹介と検討―」(一)～(四)にその一部が紹介されている。掲載場所は以下のとおり。第一回同誌平成五年(一九九三)十一月号二二～三〇頁、第二回同誌同年十二月号二二～二九頁、第三回同誌平成六年一月号三二～三七頁、第四回同誌同年二月号二二～二九頁。成立の経緯は、第一回の二九頁に紹介がある。
- (119) 『茶道古典全集』第十巻、淡交新社、昭和三十六年(一九六一)、一〇五～一三〇頁。成立は一三〇頁に紹介がある。
- (120) 前掲『茶祖的伝』『茶湯』六号、三七～五九頁。
- (121) 前掲『茶祖的伝』『茶湯』六号、三九頁。解題は筒井紘一。
- (122) 注84においてのべたとおり。成立の経緯は、杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』三〇四頁。
- (123) 松山吟松庵・熊倉功夫、前掲『茶道四祖伝書』二二頁。
- (124) 北条氏規は天文十四年(一五四五)に生まれ、慶長五年(一六〇〇)に死去している。その娘が松永久秀(天正五年(一五七七)没)に嫁すのは、年齢的に無理であろう。また、その娘が千少庵(天文十五年(一五四六)生)を産むことなどありえない。
- (125) 前掲『茶祖的伝』『茶湯』六号、五二頁。また、五〇頁には「道安の実子八元伯宗旦也」とある。
- (126) 数江教一、前掲『千利休由緒書について』六七、六八頁。杉本

捷雄、前掲『千利休とその周辺』三二五、三二七頁。前掲『利休大事典』六五五、六五六頁。熊倉功夫・氏家幹人、前掲「千利休伝記」三〇一、三〇三頁。

(127) 杉本捷雄、前掲『千利休とその周辺』三〇六頁。

(128) 本文で紹介した以外に、熊倉功夫「若き日の千利休『千利休由緒書』」『茶道雑誌』平成十九年（二〇〇七）二月号には、つぎのような指摘がある。

これが千家で公表した由緒です。（略）ただし、この時代は大名から庶民まで、家の由緒とか系図とかをこしらえるのが大流行したのですから、由緒書に書かれていることを鵜呑みにするわけにはいきません。一つの伝承として読むべきでしょう。

（五六頁）

(129) 芳賀幸四郎『千利休』吉川弘文館、昭和三十八年（一九六三）

初版、昭和六十一年（一九八六）新装版、二六五頁。

(130) 芳賀幸四郎、同右書、二七一頁。

(131) 西山松之助「家元の研究」『西山松之助著作集』第一巻、吉川

弘文館、昭和五十七年（一九八二）、三四五頁。

(132) 西山松之助は、茶の湯におけるこの現象を「寛文・延宝から元禄にいたる十七世紀末」（西山、同右書、三四五頁）の時期の問題として論じている。であるならば、承応二年（一六五三）の『千利

休由緒書』は年代的に先行するし、その内容も萌芽的な印象がある。

(133) 村井康彦、前掲『千利休―その生涯と茶湯の意味』五一〜五二頁。

(134) 神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』角川学芸出版、平成

十七年（二〇〇五）、六三頁。

(135) 熊倉功夫は、これについて、宮王三入のおかげで難をのがれた松永久秀が、宮王三入の後家を養女として、千利休に嫁がせたという解釈を試みている（熊倉功夫「千少庵伝断章」『禅文化研究所紀要』第二十六号、禅文化研究所、平成十四年（二〇〇二）、二二五頁）。筆者は、北条氏規の女説などを考えると、千家になんらかの關係（この場合は資料に名前があっただけである）があった著名人の名前が、弟子などの周辺の人々によってもはやされて尾鱈がついてしまったという単純なものではないかと推測する。

(136) 表千家の弟子である稲垣休叟が著した『茶祖的伝』に北条美濃守氏規の女とか、道安実子説とか、表5の上でも格段に「一線を越える」内容であるのは、弟子たちが千家に対して「かくあれかし」と念願したことが直截に表現されているためと理解できる。

(137) 千宗左（即中齋）「少庵三百五十年忌に語る」『茶道雑誌』昭和三十八年（一九六三）十一月号、二八頁。

(138) 千宗左（即中齋）、同右論文、三二頁。

(139) その後、表千家第十四代千宗左（而妙齋）は、少々不思議な発言をしている。著書の『茶の湯随想』（主婦の友社、平成十三年（二〇〇一）、二二七頁）において、

利休の辞世とは別に、妻宗恩あての一首として、

利休めはとかくみようか（冥加）のものぞかし

かんせうしやう（音丞相）になるとおもへは

の狂歌が残されています。（傍線筆者）

と紹介している。「利休血脈論争」のなかでは、この狂歌は、千利

休娘かつ千少庵妻であるお亀宛のものとされ、「利休娘実子説」のもっとも重要な根拠とされたものである。それに対して、「妻宗恩あて」という解釈を示すことは、「お亀」＝「千利休娘」＝「千少庵妻」の構図をくずすものであり、「お亀」の存在自体の否定に至ることとなる。

- (140) 千宗左（即中斎）、前掲、二七頁。
- (141) 杉本捷雄、前掲「文禄、慶長利休像余談」五四頁。
- (142) 二つの引用は、磯野風船子「少庵の父を文学的に考察する（二）」『茶道雑誌』昭和三十九年（一九六四）一月号、三六、三七頁。
- (143) 村井康彦、前掲「少庵と道安（その四）」九八頁。
- (144) 西山松之助、前掲「家元の研究」二二頁ほか。
- (145) この経緯については、西山松之助、前掲「家元の研究」三五六～三六四頁参照。
- (146) 谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』（淡交社、平成十七年（二〇〇五）第三章茶の湯の歴史において、近代数寄者の活躍の時代のつぎの時代区分は「9 女性の進出と家元の復権」として論じられている。
- (147) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、昭和五十五年（一九八〇）、三二五頁。
- (148) 第二次世界大戦直後に封建制批判の観点から、家元に対する学問的研究がいくつも行われた。主な論者として、川島武宣（「家元制度」思想の科学研究会編『芽』第四号、建民社、昭和二十八年（一九五三））、林屋辰三郎（「家元制度の確立」同『芽』第四号）らあげられる。家元に関する本格的な研究は、このころにはじまる

と考えられる。

- (149) 昭和三十年（一九五五）の、有史以来の好景気という意味の「神武景気」にはじまり、日本経済は高度成長状況を継続した。経済成長率（GDP伸び率）は実質7～8%におよび、「奇跡の復興」と呼ばれ、世界経済のなかでも際立った存在だった。この状況は、昭和四十八年（一九七三）のオイルショックで終焉をむかえた。
- (150) 熊倉功夫『日本茶道全史の構想』木芽文庫編『茶湯』二十三号、思文閣出版、平成六年（一九九四）、一一頁。
- (151) 経済史家である戸上一は、人々の意識の問題を考えると、この高度経済成長による日本社会の変容を重視して、つぎのように述べている。

事態を一変させたのは、日本経済の高度経済成長とテレヴィジョンの普及である。高度経済成長によって一億総中流化がすすみ、小金を蓄えた大衆が、何らかのステイタス・シンボルをもとめて蠢動しはじめる。そうした大衆の文化的欲求を巧みに受けとめた芸能が茶道であった。宗匠たちは、個の面貌をもたぬテレヴィジョンと大衆向け出版物を、従属を必要とせぬ新たな庇護者として、自立と繁栄への途を歩むことになる。危険で、気紛れな権力者は、疾く姿を消し、茶の湯者・宗匠が文字通り茶室の亭主におさまったのである。それは、歴史上、まことに希有な現象であった。（戸上一『千利休 ヒト・モノ・カネ』刀水書房、平成十年（一九九八）、一〇六～一〇七頁）

- (152) 千宗室（鵬雲斎）『茶の心』毎日新聞社、昭和四十六年（一九七二）、七頁。

(153) 前注の引用文の省略部分。

(154) 『淡交』昭和三十年（一九五五）三月号、淡交社、巻頭折込の裏面。